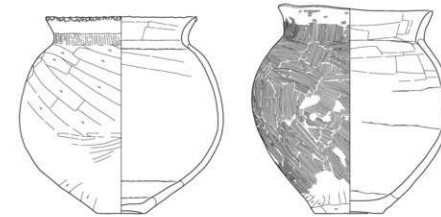


# 町付遺跡

（第15地点）

共同住宅建築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



2016

水戸市教育委員会  
株式会社シン技術コンサル

# 町付遺跡

(第15地点)

共同住宅建築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2016

水戸市教育委員会  
株式会社シン技術コンサル



## ごあいさつ

水戸市是那珂川の流域に位置し、八溝山系の山並みと那珂川・千波湖の豊かな自然に囲まれています。そして、私たちの祖先もこの豊かな自然のもと生活を営んできました。

町付遺跡は、市内東部の吉田台地と呼ばれる低台地上に位置し、これまでの発掘調査から、弥生時代から近世に至るまで、連続と土地利用が行われていたことがわかっています。とくに、奈良・平安時代においては、古代の官道と推測される道路跡が発見されており、当時の地域史を知るうえで、非常に貴重な遺跡であると言えます。

歴史的文化遺産である埋蔵文化財は、その性格上、一度壊されてしまうと二度と現状に復すことができないため、私たちが大切に保存しながら後世に伝えていかなければならない貴重な財産です。

高度経済成長期から、町付遺跡周辺での都市化も大きく進むにつれて、遺跡の様相も大きく変わり、都市化と文化財保護の両立が行政としても大きな課題として懸念されるところではありますが、本市においてもその意義や重要性を踏まえ、文化財保護法並びに関係法令に基づき保護保存に努めているところです。

さて、このたび計画された共同住宅の建築工事につきましては、文化財保護の観点から遺跡への影響を考慮し、十分な協議を重ねてまいりました。その結果、今回の計画によって、遺跡の一部について現状保存が困難であるとの結論に至り、次善の策として、記録保存を目的とした発掘調査を実施することとなりました。

今回の調査では、古墳時代前期の竪穴建物跡4軒が発見され、建物内からは、多くの土器が出土しています。今回の調査成果も、この地域における当時の人々の生活を知る上で、重要な成果であると言えます。

ここに刊行する本書を、かけがえのない貴重な文化財に対する意識の高揚と学術研究等の資料として、広く御活用いただければ幸いです。

終わりに、調査実施に当たり御理解と御協力を賜りました関係各位に心から感謝申し上げます。

平成28年3月

水戸市教育委員会教育長 本多 清峰



## 例 言

- 1 本書は、共同住宅建築工事に伴う町付遺跡（第15地点）の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、事業主体者である大和ハウス工業株式会社の委託を受け、水戸市教育委員会の指導・監督の下、株式会社シン技術コンサルが実施した。
- 3 調査概要及び調査組織は下記の通りである。

所在地	水戸市酒門町 638-1, 639-1, 640-1 地内の各一部
調査面積	81.4㎡
調査期間	平成 27 年 11 月 16 日 から 平成 27 年 12 月 10 日 まで
調査主体	株式会社シン技術コンサル 北関東支店（支店長 平井 貢）
調査担当者	吉澤 学（株式会社シン技術コンサル）
調査参加者	有田 洋子・石川 勉・小山 司農夫・河原井 俊吉郎・皆川 幸子
調査指導 事務局	水戸市教育委員会（教育長 本多 清峰）

中里 誠志郎	教育部長
白石 嘉亮	歴史文化財課課長
山田 規生	歴史文化財課課長補佐
関口 慶久	歴史文化財課文化財係長
川口 武彦	歴史文化財課文化財係主幹
内田 理恵	歴史文化財課文化財係主幹
薄井 俊平	歴史文化財課文化財係主幹
飯村 博史	歴史文化財課埋蔵文化財センター所長
米川 暢敬	歴史文化財課埋蔵文化財センター文化財主事
太田 有里乃	歴史文化財課埋蔵文化財センター主事
山戸 祐子	歴史文化財課埋蔵文化財センター嘱託員
丸山 優香里	歴史文化財課埋蔵文化財センター埋蔵文化財嘱託員
昆 志穂	歴史文化財課埋蔵文化財センター埋蔵文化財嘱託員
下山 はる奈	歴史文化財課埋蔵文化財センター埋蔵文化財嘱託員
菅谷 瑛奈	歴史文化財課埋蔵文化財センター埋蔵文化財嘱託員

- 4 本書は、吉澤・米川が分担して執筆し、米川の助言・指導に基づいて吉澤が編集した。
- 5 出土遺物及び図面・写真などの記録類は、報告書刊行後一括して水戸市大串貝塚ふれあい公園にて保管している。
- 6 発掘調査から本書の刊行に至るまで、下記の方々・諸機関より御教示・御協力を賜った。記して深く謝意を表したい（敬称略・順不同）。  
アグリサポートおぎや

## 凡 例

- 1 本書に記している座標値は、世界測地系に基づく。挿図中で平面図の方位記号は座標北を、土層断面図の水準線高の数値は海拔標高をそれぞれ示す（単位：m）。
- 2 文章中における方位の記述については、調査時に設定した任意の方位を用いている。その設定方法は、B区左右の調査区壁ラインを南北軸とした。ただし、竪穴建物跡の主軸など数値上の計測方位に関しては、座標北を基準とした実際の値を用いた。
- 3 土層及び遺物の色調は『新版標準土色帖』（農林水産技術会議事務所・（財）日本色彩研究所色票監修 2005年版）に準拠する。
- 4 遺構及び土層断面の略称に使用した記号は以下のとおりである。なお、攪乱については「K」を用いた。  
竪穴建物跡：SI      ビット：P
- 5 遺構平面図及び土層断面図の縮尺は、1/60を基本とし、各図にスケールを付した。
- 6 遺物実測図の縮尺は、1/3を基本とし、各図にスケールを付した。
- 7 遺物法量の計測値については、cm及びgで示した。
- 8 遺物番号は、実測図・観察表・写真図版いずれも共通する。
- 9 挿表中における括弧付き数字については、（ ）内が推定値、[ ]内が残存値を示す。
- 10 引用・参考文献は、一括して本文末に取めた。

## 本文目次

ごあいさつ

例言・凡例・目次・抄録

I	調査に至る経緯	1
1	調査に至る経緯	1
II	遺跡の周辺環境	2
1	地理的環境	2
2	歴史的環境	2
3	町付遺跡における既往の調査	7
III	町付遺跡第15地点の調査	9
1	調査の方法と経過	9
2	基本土層	9
3	検出された遺構と遺物	11
IV	総括	26
1	第1地点及び試掘調査の概要	26
2	竪穴建物跡の構造と設計規格	28
3	竪穴建物跡出土遺物の様相	30
4	竪穴建物跡の時期細分	34

引用・参考文献

写真図版

## 図 版 目 次

第 1 図	町付遺跡の位置	1	第 13 図	第 3 号竪穴建物跡出土遺物 (2)	20
第 2 図	町付遺跡周辺の遺跡分布地図	5	第 14 図	第 4 号竪穴建物跡 (1)	22
第 3 図	既往調査地点位置図	8	第 15 図	第 4 号竪穴建物跡 (2)・同出土遺物 (1)	23
第 4 図	調査対象地の位置	9	第 16 図	第 4 号竪穴建物跡出土遺物 (2)	24
第 5 図	基本土層	10	第 17 図	第 1・2 号ピット	25
第 6 図	遺構配置図	11	第 18 図	遺構外出土遺物	25
第 7 図	第 1 号竪穴建物跡・同出土遺物	13	第 19 図	第 15 地点周辺における既往の調査との照合	27
第 8 図	第 2 号竪穴建物跡 (1)	15	第 20 図	古墳時代前期竪穴建物跡集成図	29
第 9 図	第 2 号竪穴建物跡 (2)	16	第 21 図	SI-02 における設計企画抽出案	30
第 10 図	第 2 号竪穴建物跡出土遺物 (1)	17	第 22 図	第 15 地点竪穴建物跡出土土器部集成図	31
第 11 図	第 2 号竪穴建物跡出土遺物 (2)	18	第 23 図	第 1 地点竪穴建物跡出土土器部集成図	32
第 12 図	第 3 号竪穴建物跡・同出土遺物 (1)	19	第 24 図	各竪穴建物跡出土土器編年表	35

## 表 目 次

第 1 表	町付遺跡周辺の遺跡一覧	4	第 7 表	第 4 号竪穴建物跡出土土器観察表	24
第 2 表	町付遺跡における既往の調査一覧	7	第 8 表	遺構外出土土器観察表	25
第 3 表	第 1 号竪穴建物跡出土土器・土製品観察表	12	第 9 表	遺構外出土土器観察表	25
第 4 表	第 2 号竪穴建物跡出土土器観察表	16	第 10 表	第 15 地点出土遺物総量	26
第 5 表	第 2 号竪穴建物跡出土石製品・石器観察表	16	第 11 表	古墳時代前期竪穴建物跡属性表	28
第 6 表	第 3 号竪穴建物跡出土土器観察表	20			

## 写真図版目次

写真図版 1	A 区全景 (東から) A 区基本土層 (東から) B 区基本土層 (南から) B 区全景 (北から)	写真図版 5	第 3 号竪穴建物跡 床面完掘状況 (北西から) 第 3 号竪穴建物跡 遺物出土状況全景 (北から) 第 3 号竪穴建物跡 遺物 No. 16・18 出土状況 (南東から) 第 3 号竪穴建物跡 杉跡完掘状況 (北西から) 第 4 号竪穴建物跡 床面完掘状況 (北東から)
写真図版 2	第 1 号竪穴建物跡 床面残存状況 (南から) 第 1 号竪穴建物跡 遺物 No. 1 出土状況 (南から) 第 1 号竪穴建物跡 杉跡残存状況 (南から) 第 1 号竪穴建物跡 PO1 完掘状況 (南から) 第 1 号竪穴建物跡 掘り方完掘状況 (東から) 第 1 号竪穴建物跡 遺物 No. 2 出土状況 (南から) 第 1 号竪穴建物跡 PO2 完掘状況 (南から) 第 1 号竪穴建物跡 PO6 完掘状況 (南から)	写真図版 6	第 4 号竪穴建物跡 遺物出土状況 (北東から) 第 4 号竪穴建物跡 遺物 No. 21 出土状況 (南東から) 第 4 号竪穴建物跡 遺物 No. 22・23 出土状況 (南東から) 第 4 号竪穴建物跡 遺物 No. 24 出土状況 (東から) 第 4 号竪穴建物跡 土層根材分布状況 (南西から) 第 4 号竪穴建物跡 杉跡完掘状況 (北東から) 第 4 号竪穴建物跡 PO1・04・05 完掘状況 (北東から)
写真図版 3	第 2 号竪穴建物跡 床面完掘状況 (南東から) 第 2 号竪穴建物跡 遺物出土状況全景 (南東から) 第 2 号竪穴建物跡 北部遺物出土状況 (南西から) 第 2 号竪穴建物跡 遺物 No. 10 出土状況 (南東から) 第 2 号竪穴建物跡 南部遺物出土状況 (北西から)	写真図版 7	第 4 号竪穴建物跡 PO2 完掘状況 (北東から) 第 4 号竪穴建物跡 PO2 土層断面 (北東から) 第 4 号竪穴建物跡 PO3 完掘状況 (北東から) 第 4 号竪穴建物跡 PO3 土層断面 (北東から) 第 4 号竪穴建物跡 掘り方完掘状況 (北東から) 第 4 号竪穴建物跡 PO6 完掘状況 (北東から) 第 1 号ピット 完掘状況 (北から) 第 2 号ピット 完掘状況 (東から)
写真図版 4	第 2 号竪穴建物跡 遺物 No. 9 出土状況 (南から) 第 2 号竪穴建物跡 焼土堆積状況 (東から) 第 2 号竪穴建物跡 PO1 完掘状況 (南東から) 第 2 号竪穴建物跡 PO1 土層断面 (南東から) 第 2 号竪穴建物跡 PO2 完掘状況 (南東から) 第 2 号竪穴建物跡 PO2 土層断面 (南から) 第 2 号竪穴建物跡 掘り方完掘状況 (南東から) 第 2 号竪穴建物跡 PO3 完掘状況 (南から)	写真図版 8	第 1 号竪穴建物跡出土遺物・第 2 号竪穴建物跡出土遺物 (1)
		写真図版 9	第 2 号竪穴建物跡出土遺物 (2)・第 3 号竪穴建物跡出土遺物
		写真図版 10	第 4 号竪穴建物跡出土遺物・遺構外出土遺物



## 報告書抄録

ふりがな	まちつきいせき (だいじゅうごちてん)							
書名	町付遺跡 (第15地点)							
副書名	共同住宅建築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	水戸市埋蔵文化財調査報告 第78集							
編集者名	吉澤学・米川暢敬							
著者名	吉澤学・米川暢敬							
編集・発行機関	水戸市教育委員会	所在地	〒310-0852 茨城県水戸市笠原町 978-5 029-306-8132 (歴史文化財課)					
発行年月日	2016 (平成28) 年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡 番号					
町付遺跡 (第15地点)	茨城県水戸市酒門町 638-1、639-1、640-1	201	235	36° 21' 0"	140° 29' 56"	2015/11/16 ～ 2015/12/10	81.4	共同住宅建築工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
町付遺跡 (第15地点)	集落跡	縄文時代			石鏃	検出された竪穴建物跡はいずれも古墳時代前期に比定され、東側に隣接する第1地点でも同時代の竪穴建物跡が4軒確認されていることから、それぞれが同一の集落に含まれると考えられる。また、現在確認されている竪穴建物跡の時期は前期後半～末頃の構築と考えられる。		
		弥生時代			弥生土器			
		古墳時代	竪穴建物跡 4軒		土師器, 土玉, 砥石, 台石			
		時期不明	ピット	2基				

※北緯・東経は世界測地系

# I 調査に至る経緯

## 1 調査に至る経緯

平成 27 年 7 月 25 日付けで、共同住宅建築工事に伴い、事業者から水戸市教育委員会（以下「市教委」という。）教育長あて、埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて照会があった。

今般の事業計画地である水戸市酒門町 638-1, 639-1, 640-1 は、周知の埋蔵文化財包蔵地「町付遺跡（遺跡番号 201-235）」の範囲内に該当していることから、事業者が工事着手の 60 日前までに文化財保護法第 93 条に基づく届出が必要である旨回答するとともに、事業者から提出のあった事業計画に基づき、平成 27 年 8 月 18 日から 8 月 19 日、9 月 11 日に試掘・確認調査を実施したところ、建築予定建物直下、合併浄化槽等埋設予定箇所、切り土工事実施予定箇所等、工事に伴い掘削が計画されている複数の箇所において、竪穴建物跡を中心とした濃密な埋蔵文化財の分布を確認した。今回の事業計画と調査成果を重ね合わせたところ、発見された埋蔵文化財への工事による影響が懸念されたことから、平成 27 年 9 月 11 日に、設計変更を視野に入れ、再度試掘調査を実施したが、その調査結果は、開発対象地内における濃密な埋蔵文化財の分布、という第 1 次調査の結果を補強するものでしかなかった。そこで、これらの埋蔵文化財に対し、市教委は、埋蔵文化財の保存のあり方について事業者との協議を重ねたが、建築予定建物直下については盛り土をした上での建物基礎構築への設計変更により、合併浄化槽埋設予定箇所については配置変更により埋蔵文化財への保護措置が採られることとなったものの、大型の埋設物である雨水貯留槽及び切り土工事が計画されている進入路構築箇所においては、工事による埋蔵文化財への影響は不可避であるとの判断から、上記の箇所において、遺構の現状保存は極めて困難であるとの結論に達した。このため市教委は、事業者から提出のあった文化財保護法第 93 条第 1 項に基づく届出について、建物建築工事、合併浄化槽等埋設工事に際しては工事立会、雨水貯留槽埋設箇所及び切り土工事実施箇所については、改善の策として記録保存を目的とした本発掘調査を実施すべき旨の意見書を付して茨城県教育委員会（以下「県教委」という。）教育長あて進達した。

その後、平成 27 年 9 月 25 日付けで県教委教育長から事業者に対し、上記部分において工事着手前に発掘調査の実施を要すること、調査の結果重要な遺構が確認された場合にはその保存について別途協議を要する等の旨、指示・勧告があった。

これを受けて事業者は、市教委、株式会社シン技術コンサルと発掘調査実施に係る協定書を締結したうえで、株式会社シン技術コンサルと発掘調査業務委託契約を締結し、当該調査を町付遺跡第 15 地点発掘調査として、平成 27 年 11 月 16 日から発掘調査を実施することとなった。

（米川）



第 1 図 町付遺跡の位置

## II 遺跡の周辺環境

### 1 地理的環境

水戸市は、茨城県の中央部に位置し、関東平野の北東部地域に所在する。厳密には常総台地に包括される茨城台地北部に相当し、市域の東端部はひたちなか市・東茨城郡大洗町を介して太平洋に近接する。地形的には北東方向へ流下する那珂川沿岸の沖積層低地、その西側に広がる洪積層台地、台地北西端部から鷲足山塊外縁部へと続く第三紀丘陵地区に大別され、このうち台地区が市域の大半を構成する。この台地区は「水戸台地」の通称があり、台地面の標高は20～30m前後で、縁辺には河岸段丘や急崖地形が発達する。

これらの低地や台地区は、関東平野の造盆地運動を契機に基盤が形成され、その後、那珂川の氾濫や変流作用と、その支流である中小河川の開析が進行して現在の姿となった。那珂川は栃木県北端部の那須連山に源流を発する全長約150kmの一級水系河川で、八溝山地の西縁部を南流した後に栃木県東端部の鎌倉山麓で一旦東折し、東茨城郡城里町地内で御前山を背後に据えて南東方向へと流下する。そして水戸市域の東寄りを買流し、最終的にひたちなか市と大洗町との境界を経由して太平洋へと到達する。このような河川形態は内陸部と太平洋沿岸部との往還に格好の条件を備え、歴史的に照らせば水戸市域が古代以前から水陸双方の交通網の接続拠点として機能してきた説を首肯させる。水戸台地から那珂川に注ぎ込む支流には、市域北部の藤井川・田野川、中央部の桜川、南縁部の潤沼川などが代表例として挙げられ、このうち桜川は台地区を南北二分する最大の支流である。ちなみに桜川も那珂川とともに水戸市の歴史的発展に密接に関わる河川の一つであり、特に近世以降の桜川兩岸には、現在の水戸市街地の前身となる城下町が栄えた。この桜川も北から沢渡川、南から逆川の水を集め、他の支流とともに台地面を樹枝状に開析している。このため、水戸台地は上市・見和・千波・吉田などの小台地に分断され、概観して複雑な形状を呈している。

町付遺跡は、逆川と潤沼川の間形成された吉田台地の北縁部に位置する。北側は台地を開析する小支谷の谷頭に面し、さらに北側には那珂川右岸に形成された狭長な低地帯を臨む立地環境である。調査地周辺の現況地形は概ね平坦だが、微弱な起伏が連続して認められ、調査地内での標高は29m前後を測る。

(吉澤)

### 2 歴史的環境

町付遺跡については、従前の調査により弥生時代後期～古墳時代中期・平安時代の堅穴建物跡のほか、平安時代から近世まで踏襲される道路状遺構が検出されている。また、吉田台地上及びその周辺地域は先土器時代から人々の生活痕跡が認められることで知られ、その時代ごとの内容は、概ね下記の通りである。

#### 先土器時代

当該期の遺跡は、国外の吉田台地東部地域、中でも石川川沿岸にまとまる傾向があり、右岸の森戸古墳群からは台形様石器が、対岸の中ノ湖遺跡からは橋本編年Ⅱc期に比定される尖頭器が出土している。また、本遺跡から東に一つ谷を隔てた薄内遺跡(185)では、堅穴建物跡の覆土から珪質頁岩製の微細剥離ある剥片が1点出土しており、これも当該時代の遺物と推定されている。

#### 縄文時代

百合が丘町域で、先土器時代～縄文時代草創期に比定される獅子柴型尖頭器が採集されており、町付遺跡第1地点や大鋸町遺跡(011)、横宿遺跡(057)、薄内遺跡では早期の土器が出土している。このうち大鋸町遺跡の土器をみると、鬚糸文系の稲荷台～花輪台1式、沈線文系の竹ノ内式末～三戸式古段階、田戸下層式・田戸上層式の各型式が認められる。ただし遺構については、いずれの遺跡でも未発見である。

前期に入ると台地斜面や下縁には貝塚が、台地上には集落が単発的に形成されるようになる。本遺跡の南東方700m程に位置する谷田貝塚(001)では、廃絶した堅穴建物跡内に汽水性のヤマトシジミを主体とする貝層が堆積し、そこから出土した土器は前葉間山式期に比定される。また、谷田貝塚背後の台地上には谷田下ノ内遺跡

(002) が立地し、晩期主体の集落として著名であるが前期の遺物も出土しており、貝塚との有機的な関連が推定される。さらに図外の東方4.5km程には国指定史跡の大串貝塚が存在し、その西側には大串遺跡が近接して位置する。ともに前葉花積下層式・関山式期の土器が出土しており、一連の遺跡と認識できる。そのほか前期の遺跡としては大網町遺跡、荷鞍坂遺跡(162)などが挙げられるが、全体的に当該期の遺跡分布は散漫である。

中期から後期になると遺跡数は増加し、堅穴建物跡の発見例こそ少ないものの各遺跡からの遺物出土量が顕著になることや、土坑群など集落の外縁を示す遺構が一部の調査で確認されており、定住性をもつ集落の片鱗を窺うことができる。中期でも早い段階の例では雁沢遺跡(141)で初頭の五領ヶ台式土器が、大網町遺跡で前葉の阿玉台式土器が少量ではあるが出土している。中葉の加曾利E式期以降は吉田台地の各所で遺物の出土がみられ、左側図外の北西約2.1kmの台地北縁には当該期の吉田貝塚が形成される。後期の遺跡では、酒門小学校遺跡(004)、安楽時遺跡(009)、乗越沢遺跡(140)などで遺物が採集されている。

晩期の遺跡は極端に減少し、その様相については不透明である。ただし谷田下ノ内遺跡は中期加曾利EⅡ・Ⅲ式から晩期まで継続して遺物が出土し、その型式は後期堀之内Ⅰ式、加曾利B2式、安行Ⅰ・Ⅱ式、晩期大洞B式、大洞B-C式、大洞C1式、大洞C2式、安行Ⅲa～Ⅲb式、前浦式など多種にわたる。これらは陸田造成工事の削土作業中に偶然発見されたものであり、集落の実態については不明な部分が多いが、小貝塚を伴っていたようである。遺物数量では晩期中葉の所産が最多であり、各種石器のほか骨角器、土製有孔円盤、石剣など、土器以外の遺物も豊富である。注目すべきは出土土器に関東系と東北系両者が混在することであり、両文化の漸移地域としての特色をみせている。

#### 弥生時代

後期以降の遺跡が主体である。ただし、限定的ではあるが中期以前の遺物が出土した例もあり、薄内遺跡では、古墳時代前期の堅穴建物跡の覆土から前期末葉～中期初頭の土器がまとまって出土した。集落の発達後は後期後半の十王台式期に最盛を迎えるようであり、大網町遺跡の8軒など堅穴建物跡の検出例が増加するほか、直近の例では町付遺跡第1地点で当該期の堅穴建物跡1軒が検出されている。また、遺物の出土例だけを列挙すれば塚坪遺跡(003)、横宿遺跡、吉田古墳群(072)、雁沢遺跡、酒門台遺跡(160)、荷鞍坂遺跡、六地蔵寺遺跡(181)などがあり、吉田台地上における土地開発の本格化を窺わせる。

#### 古墳時代

前期の集落は、弥生時代後期後半の集落立地を踏襲して成立する例が目立ち、特に町付遺跡の集落は従前確認された堅穴建物跡の分布状況や、遺跡範囲が広いことなどから、当該期における中心的な集落の一つであったと思われる。また、大網町遺跡では前期のうちに集落の営みが一時的に断絶し、中期後半から再開するという現象がみられる。中期後半以降の堅穴建物跡は後期初頭まで31軒を数えるとともに、TK208～TK47型式段階の古式須恵器が9点出土している。本遺跡周辺では中期以降集落の分布が希薄となる傾向があり、それだけに同集落の拠点的性格が強調される。むしろ典型的な後期の集落は吉田台地東部に展開し、相対して本遺跡周辺では閑散たる状況が続くのである。終末期の7世紀後半にも集落の動向に大きな変化が認められ、吉田台地から桜川を隔てた上市台地の北縁、本遺跡の北東約8.5kmに位置する台渡里遺跡群(後述)一帯では突如として集落が激増する。また、関東初期寺院の一つである台渡里廃寺(観音堂山地区寺院)も創建される。台渡里遺跡群は後の律令体制下における常陸国那賀郡御の比定地であり、このような政治的一大事業の遂行を前提に、集落が再編されたことを示唆している。

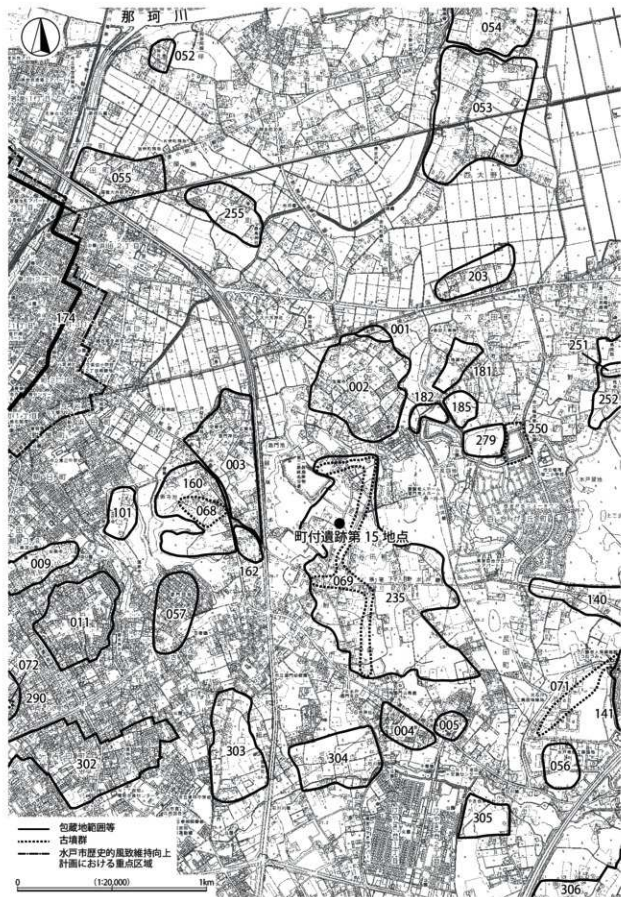
各期の集落に対応する墓域については、道西遺跡(279)から前期の方形周溝墓が3基検出されているものの、同時期の高塚古墳は今のところ管見に触れない。巨視的にみれば、前期から中期にかけての造墓活動は吉田台地東部から潤沼川右岸の台地上(大洗町域)にて展開する節がある。実際、吉田台地東縁には三角縁神獣鏡が出土したことで知られる大場天神山古墳(前方後円墳・墳丘規模不明)が出現するほか、対する大洗町域側では姫塚古墳(前方後方墳・推定墳丘長約30m)を嚆矢に坊主山古墳(前方後円墳・推定墳丘長約85m)、鏡塚古墳(前方後円墳・推定墳丘長約105m)、車塚古墳(円墳・直径約88m)といった当該期的大型古墳が連続と築造され、那珂川河口ひいては太平洋を眼下に眺望し得るといった景観上の条件が、地域首長たる各被葬者の造墓地に好

適だったであろう。ところで本遺跡周辺の古墳をみると、その築造時期はいずれも後期以降に落ち着くようである。これらは中小規模の円墳が主体となって少数で群を構成し、中には墳丘長20～30m級の小型前方後円墳を盟主墳に据える例もある。本遺跡の範囲内にも谷田古墳群(069)が位置し、前方後円墳2基と円墳5基の存在が知られている。しかし発掘調査が実施された古墳は皆無であり、埋葬施設や副葬品等、その様相は明らかでない。このように未調査古墳が大半を占める周辺地において、西門台古墳群(068)に近い荷鞍坂遺跡の調査では円墳の基底部が検出され、周堀から多量の埴輪片が出土した。同古墳群に属する1基とみられ、後期の築造とみられている。また吉田古墳群内には切石積の横穴式石室内に線刻画をもつ第1号墳があり、ひたちなか市の虎塚古墳とともに関東における装飾古墳の代表例として名高い。同古墳のさらなる特色を挙げれば、平成17(2005)年から着手された範囲確認調査で周堀平面に稜角が検出され、やや不整ながらも東日本では数少ない八角形墳の可能性が指摘された。調査所見によると規模は周堀内径で26.2m、外形で35.2mを測り、築造時期は終末期でも7世紀中葉に比定されている。興味深いのは、その北側に残存する第2号墳が現況で一辺14m程の方墳状を呈し、露出する石材から第1号墳同様の埋葬施設が推定される点である。ともすれば吉田古墳群の被葬者が、八角形墳・方墳といった畿内の終末期古墳でも上位級の埴丘形態を採用していたことになり、畿内勢力と緊密な関係保持した相応勢力が吉田台地上に君臨していたという期待に繋がるのである。

第1表 町付遺跡周辺の遺跡一覧

No	遺跡名	種別	遺物	備考
001	谷田貝塚	貝塚	縄文土器(前)・貝殻	
002	谷田下ノ内遺跡	集落跡	縄文土器(前～後)、土師器(奈・平)、須恵器	
003	崎坪遺跡	集落跡	弥生土器(後)、土師器(奈・平)、須恵器(奈・平)、陶器	
004	西門小学校遺跡	集落跡	縄文土器(中・後)、石斧	
005	西門東原遺跡	集落跡	縄文土器(中)、石斧、石鏃	
009	安楽寺遺跡	集落跡	縄文土器(中・後)、石斧、石鏃、四石、石皿、土器片鏃	
011	大東町遺跡	集落跡	縄文土器(早・晩)、弥生土器(後)、土師器(奈・平)、須恵器(古、奈・平)	
052	古土坪遺跡	集落跡	弥生土器(後)、土師器(古前)	
053	西大野遺跡	集落跡	土師器(古前)	
054	東大野遺跡	集落跡	土師器(古後、奈・平)	
055	吉沼遺跡	集落跡	土師器(古前)、須恵器	
056	元石川柳見台遺跡	集落跡	弥生土器、鉄鏃、土師器(古)	
057	横前遺跡	集落跡	縄文土器(早)、弥生土器(後)、土師器(古前)	
068	西門台古墳群	古墳群	円筒埴輪	後門17、門2
069	谷田古墳群	古墳群	土師器(古)	後門1(2)、門5
071	江東古墳群	古墳群		門6(107)
072	吉田古墳群	古墳群	鉄鏃・鉄鏃・刀剣・勾玉	八角形1、門1
101	吉田城跡	城跡		
140	東越戸遺跡	集落跡	縄文土器(後)、土器片鏃、土師器(古)、須恵器	
141	柳沢遺跡	集落跡	縄文土器(中)、弥生土器(後)、土師器(古前)	
160	西門台遺跡	集落跡	弥生土器(後)、土師器(古、奈・平)、須恵器(奈・平)、土師質土師、陶器	
162	荷鞍坂遺跡	集落跡/古墳	弥生土器(後)、土師器(古、奈・平)、須恵器(奈・平)、円筒埴輪、形象埴輪、陶器	門(1)
174	豊原水道	水道跡	円筒	
181	六地藏寺遺跡	集落跡	弥生土器(後)、土師器(古前、奈・平)、須恵器(奈・平)	
182	西谷津遺跡	集落跡	土師器(古)、須恵器(奈・平)	
185	溝内遺跡	集落跡	縄文土器(中)、土師器(古、奈・平)、須恵器(奈・平)	
203	六反田広町遺跡	集落跡	土師器(古前～中)	
235	町付遺跡	集落跡/遺跡跡	土師器(古前)、須恵器(奈・平)、陶器	
250	六反田古墳群	古墳群		
251	伊豆原歌跡	城跡		
252	上野遺跡	集落跡	土師器、須恵器(奈・平)	
255	赤井町遺跡	包蔵地		
279	遺内遺跡	集落跡/墳墓	縄文土器、石斧、弥生土器、土師器、須恵器	方形埴輪遺2
280	東堀遺跡	集落跡	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、瓦質土器、カワラケ、陶器、磁器	
302	元吉田原遺跡	包蔵地	縄文土器(中)、土師器	
303	前原遺跡	包蔵地	縄文土器(前、後)、須恵器、カワラケ	
304	中子東遺跡	包蔵地	縄文土器(後)、土師器	
305	千束遺跡	包蔵地		
306	寺後遺跡	包蔵地	縄文土器(中～後)、土師器	

本庁市埋蔵文化財包蔵地分布地図(平成24年度版)をもとに作成



第2図 町付遺跡周辺の遺跡分布地図

## 奈良・平安時代

律令体制が始動し、既述の台渡里遺跡群内に常陸国那賀郡衙が成立する。以降は、台渡里廃寺も郡寺として機能し、周辺集落も継続して営まれる。これらが一体集中化した当時の景観は、言わば那賀郡の中核都市の様相を呈していたであろう。一方吉田台地上では、台地東端部の大串遺跡内において官衙関連施設が発見されている。平成19(2007)年に実施された第7地点の調査では、掘り込み総地床礎石建物跡や大型区画溝、多量の炭化米を伴う大型床束掘立柱建物跡が検出されており、郡衙付属の正倉別院と推定されている。そして南東約2.3kmには平津駅家推定地があることから、これと駅家機能を共有していた可能性も指摘されている。また町付遺跡第1地点の調査では、台渡里遺跡群(那賀郡衙)・大串遺跡(郡衙正倉別院)・平津駅推定地それぞれを結ぶとみられる道路状遺構の一部が検出された。この遺構の構築がどこまで遡るかは不明だが、補修を繰り返しながら近世まで使用されたことが判明している。

本遺跡周辺では、大鋸町遺跡において8～9世紀代の竪穴建物跡30軒が検出されている。他にも薄内遺跡、町付遺跡第1地点、東組遺跡(290)でも集落の一部が調査されている。遺物から採集された遺跡も多く知られるが、調査例を概観する限り8世紀から9世紀前半にかけての集落には集住傾向があり、9世紀後半以降は縮小かつ分散化することが指摘されている。この背景には、9世紀から10世紀にかけて台頭した吉田神社の存在が無視できない。吉田神社は常陸国三宮の格をもつ式内社で、その勢力はやがて政治・宗教両界での強権を握るようになる。それは10世紀前半に吉田郡が那賀郡からの独立を招くほどであり、このような政治的動向が集落形態に何らかの影響を及ぼしたと解釈するのが自然である。以降、当該期の集落は10世紀中頃までの継続性が一部に残るようだが、11世紀を下る遺構は今のところ管見に触れない。

## 中世

遺構・遺物ともに不透明であるが、吉田城跡(101)は常陸大掾氏系の吉田氏が平安時代末期に館を構えたとの伝承が残り、台地舌状部に自然要害を取り込むかたちで立地する。応永23(1416)年以降は江戸氏の居城となり、天正18(1590)年以降は佐竹氏支配の下、水戸城の支城として機能した。現在でも空堀や土塁が残存するが、縄張り自体は常照寺境内となっている。また、大鋸町遺跡では館跡の一部とみられる堀が拡張調査で確認されたほか、平成16(2004)年の調査において遺構外資料ながらも12世紀代に遡るとされる白磁皿、13世紀後半～14世紀前半の龍泉窯系青磁碗が出土している。また、15世紀以降の瀬戸美濃灰釉菊皿、火鉢の出土も認められた。この調査例が示すように、今後当該期の城館跡が、新たに発見される公算は大きい。

## 近世

江戸幕府が藩体制を敷き、慶長14(1609)年の徳川頼房入封をもって水戸藩が成立する。頼房は水戸徳川家の始祖でもあり、水戸城を居城とした。これを期に城下町は再整備され、二代目光圀の治世である寛文3(1663)年には笠原水道(174)が開通し、商業都市として発展しつつあった下市界隈を潤した。吉田台地の一部も城下町に取り込まれ、大鋸町遺跡では鉄滓や輪羽口など、鍛冶工房関連の遺物が出土している。「大鋸町」という小字名から遺跡地は木挽職人の町屋と推定されており、大工道具の修繕施設などが存在していた可能性は多分にある。そして同遺跡より外縁に移動すると城下町の郊外だからであろうか、当該期の遺構で特筆されるようなものは管見に触れない。

(吉澤)

### 3 町付遺跡における既往の調査

町付遺跡においては、これまでに計 14 地点において調査を実施しており、今般の調査が第 15 地点となる。大勢としては、そのほとんどが調査面積の狭小な試掘調査であり、調査地点数の蓄積も未だ少ないものの、概ね遺跡範囲の全体において調査を実施していると言ってもよからう。

これら 14 地点のうち、遺構が確認されたのは第 1 地点と第 5 地点の 2 地点に過ぎず、他は遺構・遺物ともに確認されなかったか、もしくは土師器片等少量の遺物の出土に留まっている。

第 1 地点では、共同住宅建築に伴い本発掘調査が実施されており、弥生時代後期から近世にかけての遺構群が発見されている。この調査により、当該遺跡の具体的な性格が明らかとなり、その成果は大きなものであったと言える。また、当該地点では、古代から近世に至るまでの間に構築・利用されたと推測される道路状遺構が検出されており、水戸市渡里町地内に位置する、古代常陸国那賀郡銜跡である台渡里官衙遺跡群と水戸市平戸町外に所在する大道端遺跡周辺にその位置が推定される平津駅とを結ぶ官道であった可能性が指摘されている。

第 5 地点では、その調査が試掘調査に留まるため、帰属年代等については詳らかではないものの、南北方向に走る溝跡が 1 条確認されている。

当該遺跡において得られた発掘調査の成果は以上のとおりであり、現状から言えば、第 1 地点と今回調査地点である第 15 地点を中心としたエリアに濃密な埋蔵文化財の分布がみられ、当該地域が往時の集落として利用されており、形を変えながらも弥生時代後期から近世に至るまで、連続とその営みが続いていたということは疑うべくもない。しかしながら、冒頭にて述べたように、調査地点の分布は散在的であるがゆえに、未だ局所的な性格が明らかになっているだけであることは否定できない。これらは今後の調査成果の蓄積に期待するところ大であるが、以後も継続的に調査を実施し、その実態把握に努めなければならぬ。

(米川)

第 2 表 町付遺跡における既往の調査一覧

地点名	調査箇所	調査(開始)日	種別	調査原因	遺構	遺物
第 1 地点	酒門町 638-1	平成 19 年 11 月 19 日	試掘調査 本発掘調査	共同住宅建築に伴う	○	○
第 2 地点	酒門町 849	平成 24 年 11 月 27 日	試掘調査	個人住宅建築に伴う	—	—
第 3 地点	谷田町 805-28	平成 25 年 2 月 28 日	試掘調査	個人住宅建築に伴う	—	—
第 4 地点	酒門町 500-1 の一部、 567-4	平成 25 年 7 月 19 日	試掘調査	宿舍建築に伴う	—	—
第 5 地点	酒門町 764-1	平成 25 年 11 月 27 日	試掘調査	個人住宅建築に伴う	○	—
第 6 地点	酒門町 2950	平成 26 年 6 月 10 日	試掘調査	老人ホーム建築に伴う	—	—
第 7 地点	谷田町 814-5	平成 26 年 8 月 5 日	試掘調査	個人住宅建築に伴う	—	○
第 8 地点	酒門町 968-1	平成 26 年 9 月 4 日	試掘調査	共同住宅建築に伴う	—	—
第 9 地点	酒門町 568-1	平成 27 年 1 月 8 日	試掘調査	店舗建築に伴う	—	—
第 10 地点	酒門町 649-1	平成 27 年 2 月 24 日	試掘調査	個人住宅建築に伴う	—	—
第 11 地点	酒門町 804-1 の一部、 804-5 の一部、 805-7 の一部	平成 27 年 2 月 24 日	試掘調査	個人住宅建築に伴う	—	—
第 12 地点	谷田町 814-3	平成 27 年 4 月 23 日	試掘調査	個人住宅に伴う	—	—
第 13 地点	酒門町 2949-1、2980	平成 27 年 5 月 12 日	試掘調査	宅地造成に伴う	—	○
第 14 地点	酒門町 763	平成 27 年 5 月 27 日	試掘調査	共同住宅建築に伴う	—	—
第 15 地点	酒門町 638-1	平成 28 年 8 月 18 日	試掘調査 本発掘調査	共同住宅建築に伴う	○	○





第3図 既往調査地点位置図

### Ⅲ 町付遺跡第15地点の調査

#### 1 調査の方法と経過

発掘調査は、事業地内で雨水貯留構設などにより、工事の深度が遺構確認面に達する2箇所を対象とした。両調査区は隣接して概ね「L」字状に並び、西側をA区、東側をB区とした。調査面積はA区35.2㎡、B区46.2㎡の合計81.4㎡である。

表土除去は、平成27年11月16日からバックホウ（バケット土量0.25㎡）を導入して開始し、同日作業を終了した。今回遺構確認面とした層位は、ソフトロームの上面に相当するものであり、現地表面からA区で概ね0.4～0.6m、B区で0.3～0.6m程の深度にて検出された。17日にはジョレン・スコップなどを用いて遺構確認や攪乱除去を行い、続く18日から遺構調査に着手し、A区の遺構から覆土の掘り下げ及び各記録作業を行った。記録の手法として、図面類については平面図と断面図の全てをトータルステーションによる三次元データで取得し、遺物出土状況の微細図のみデジタルカメラを用いた写真図化で対応した。写真類については35mmモノクロネガとカラーリバーサル2種のフィルムを用いた撮影を基本とし、そのほかデジタルカメラによる撮影も補足的に行った。これらの遺構調査は12月8日まで行い、8・9日には基本土層のテストピット掘削とその記録を実施し、10日に器材を撤収して全ての作業が終了となった。

整理作業は、12月16日から着手した。出土遺物は洗浄・注記及び接合・復元を全て手作業で行い、実測図は正射投影画像による写真図化と手測りで作成した。トレース作業は全てデジタル処理で対応し、写真についても撮影から画像加工までの一覧の作業をデジタル処理にて行った。遺構図は、現場での取得データを第一原因としてコンピューター上で編集し、これを報告書掲載用のデータに変換、第二原因として最終的な編集・修正を行った。

このようにして作成された各種データは、原稿・挿表データとともに平成28年2月10日からDTPソフトウェアでの版組みを経て印刷業者に入稿し、3月31日に本報告書として刊行された。

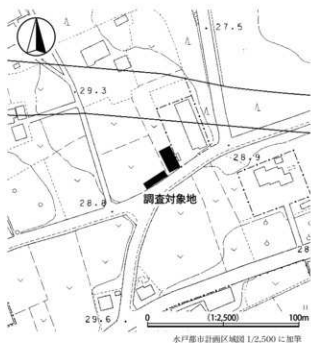
(吉澤)

#### 2 基本土層

基本土層の観察は、A区の西壁とB区の北壁で行った。それぞれ調査区壁際の中央付近に幅2m×奥行1mのテストピットを穿ち、既往の調査に従ってAg-kp（鹿沼軽石：推定3万1千～3万2千年前降下：赤城山給源）直下の灰褐色土層上部までを観察対象とした。立面的な観察範囲は、現地表面からの深さでみた場合A区・B区ともに2m前後である。なお、土層番号については今回新規で付している。

基本土層はⅠ～Ⅷ層に大別され、Ⅴ～Ⅷ層がそれぞれa・bの2層に細別される。すなわち、全体で11層の堆積を確認したことになる。以下、各層について説明を加える。

Ⅰ層は現表土層で、黒褐色を呈す耕作土で形成される。層厚は30～40cm前後を測り、層下部の起伏が少ない比較的安定した堆積状況をみせている。本層直下からⅢ層にかけては部分的に攪乱され、若干灰色がかる黒色砂質土もしくはロームブロック混じりの黒褐色土が堆積している。



第4図 調査対象地の位置

II層は暗褐色土層である。ロームの含有は少なく、斑状に散見されるのみである。B区では調査区西壁で認められ、テストピット内では観察されなかった。この点については、削平の影響が考えられる。今回検出された堅穴建物跡は、いずれも本層を掘り込んで構築されている。

III層はローム漸移層で、色調は不安定ながらも概ねぶい黄褐色を呈す。本層からV a層にかけては植物根の影響か、層厚の乱れが著しい。第1地点の調査では、本層及びIV層に相当する層中に微小な黄白色軽石の含有が報告されており、Nt-S（男性一七本木軽石：推定1万2千～1万3千年前降下：日光男体山給源）である可能性が指摘されている。

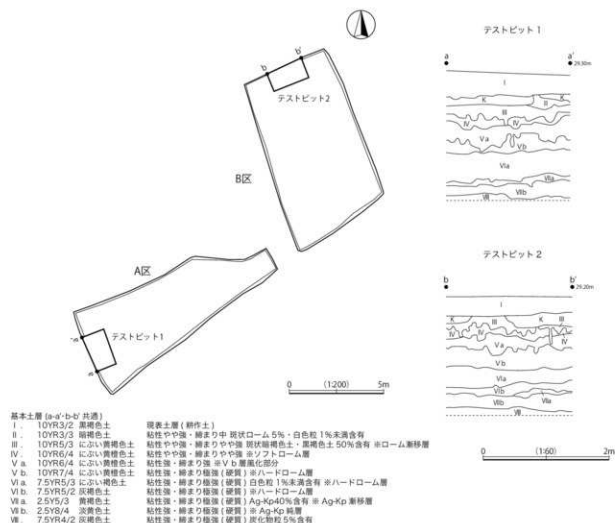
IV層はソフトローム層である。色調は直下のV a層と同じくぶい黄褐色を呈すが、下記に示す層相や硬度の違いから別の層に大別した。今回の調査では、本層上面を遺構確認面としている。

V～VI層はハードローム層である。VI層はV層よりも色調が暗く、全体的に褐色がかかる。最上層に堆積するV a層はV b層の風化及び自然擾乱で形成された層と思われる、大小のV b層ブロックが随所に含まれるほか、他のハードロームよりも若干軟質である。

VII層はAg-Kp関連の層で、VII b層が純層、VII a層がVI層との漸移層である。VII b層は15～30cm前後の厚さで堆積している。

VIII層は灰褐色土で、土質は粘土に近い。層中には少量の炭化物が含まれ、本層とVI b層との層界面は鮮明であり、Ag-Kp降下直前の旧地表面を良く残している。

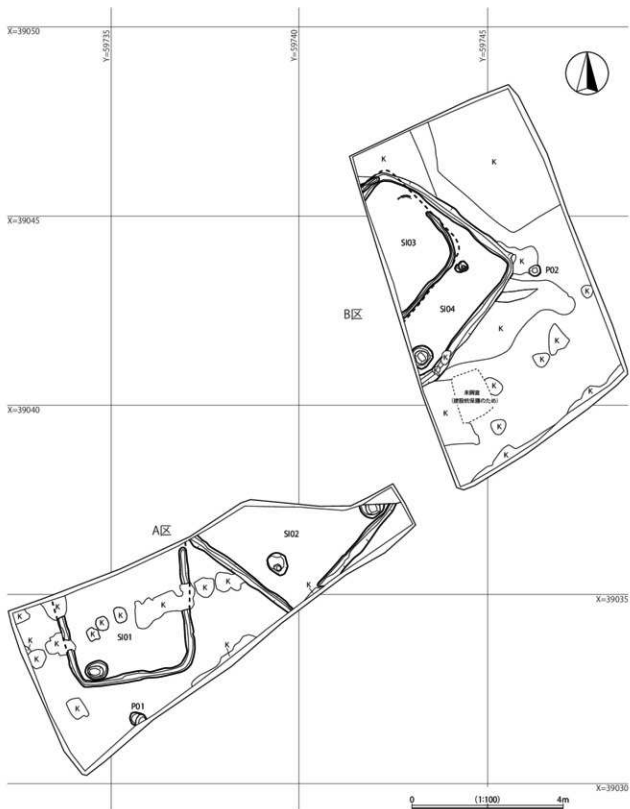
(古澤)



第5図 基本土層

### 3 検出された遺構と遺物

遺構はA区・B区双方から検出され、全体で竪穴建物跡4軒、ピット2基を数えた。竪穴建物跡はA区に2軒が接するように位置し、B区に2軒が入れ子状に重複する。遺物の殆どはこれら竪穴建物跡からの出土で、コンテナで3箱を数える。以下、検出された遺構・遺物について記述する。



第6図 遺構配置図

### 第1号竪穴建物跡 (SI01) (第7図)

**検出位置** A区西半部に位置する。北壁は調査区外にかかるが、ほぼ全体が検出された。壁の全体と床面の北半部が傾平されており、床面残存部も大半が遺構確認面で露出した状態であった。また、本建物跡を分析するかのようによぎ乱が東西に並び、残存は不良である。

**規模** 平面形状は不整形と推定され、東西3.45 m、南北3.41 m以上を測る。主軸は東壁基準でN-7-Wである。

**構造** 既述の通り壁は失われ、床面も南半部のみが残存する。床面は南壁際から中央部にかけての一部が硬化している。壁際に相当する部分には周溝を巡らせ、規模は幅13～24cm、深さ8～10cm、検出範囲内では概ね全周する。床面上及びその相当面からは、跡とみられる焼土範囲とP01が検出された。焼土範囲は北寄りに位置し、長軸37×短軸20cmを測る不定形の平面形状を呈する。被熱による焼土化は疎らで薄く、地床材の底面が一部残存した状況と推定される。P01は南西コーナー付近に位置し、長軸60×短軸49×深さ30cm、平面形状は楕円形を呈する。配置的にみれば貯蔵穴とみるのが妥当であるが、土層断面には柱材抜き取り痕とも考えられる第3層が確認でき、柱穴の可能性も否定できない。掘り方調査時には、P02～06が検出された。このうちP02・05は土層の断面観察により床面上から掘り込まれていることが判明したが、P03・04・06についても覆土の対比上概ねの共通性が認められ、併せて床面施設と判断した。P02の覆土には柱材抜き取り痕とみられる第3層が認められたほか、P03・06も垂直的な掘り込み部分を掘り方に残し、それぞれ柱穴としての機能が推定される。いずれも平面形状は円形と思われ、規模は検出部位でP02が長軸35×短軸28×深さ33cm、P03が長軸40×短軸31×深さ15cm、P06が長軸26×短軸25×深さ13cmを測る。底面標高を比較すると概ね28.2～28.3 mの間に収まり、ほぼ同等の深度を意識して床面から掘り込まれていたことが窺える。ただし位置関係ではP02が北東寄り、P03が西寄り、P06が南壁際の中央に偏在し、仮にP01を含めたとしても極めて不規則な柱穴配置となる。P04・05は土坑状に掘り込まれ、平面規模はP04が長軸54×短軸44cm、P05が長軸59×短軸39cmを測る。平面形状はともに歪むが、床面での状況は長軸70cm前後の長方形土坑が2基並列していたものと推定される。建物構築時の掘り方は、東部及び南部の底面が壁際に向かって緩やかに下がり、段差状の掘り込みは部分的である。全体の深さは3～22cmを測る。底面からは小規模な起伏が多数検出されたが、工具痕などは一切認められなかった。

**覆土** 南半部を中心に、最厚で4cm程残存していたのみである。黒褐色土で2層に分層される。

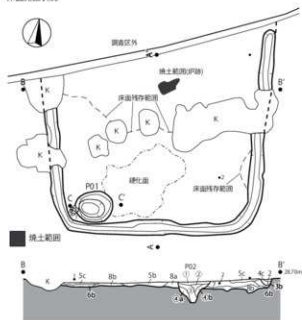
**遺物** 全体の残存状況から出土遺物は少数に留まり、図示し得たのは2点のみである。1は土師器甕で、P01直近の床面直上から正位で出土している。本建物跡に直接伴う遺物と考えられる。胴部下位のみが残存だが、本来の器高は30cm超であったと推定される。器壁は内外面ともに摩滅が激しく、外面に漠然とヘラケズリ調整が観察できる程度であった。2は土玉で、掘り方埋土から出土している。建物構築時の祭祀行為に関連する可能性もある。焼成前の粘土玉を穿孔し、丁寧なユビナデで仕上げられている。外面の一部には煤の付着が認められる。

**時期** 跡を伴う特徴や、出土遺物から、古墳時代前期と推定される。

第3表 第1号竪穴建物跡出土土器・土製品観察表

図版	遺番	出土地点 遺構	器種	法量 (cm)			焼成	胎土 胎物	色調	調整
				口径	底径	器高				
7	1	SI01	土師器甕	—	6.4	[7.1]	普通	砂粒、長石、石英 ガラス状透明粒子	外面：10YR3/1 黒褐色 内面：10YR3/2 黒褐色	外面：胴部ヘラケズリ。底面木炭痕? (摩滅のため不明瞭) 内面：(摩滅のため確認できず)
7	2	SI01	土玉	径	厚	重	普通	外面：5YR4/4 に近い 赤褐色 (一部煤付着) 内面：—	粘土玉に穿孔後、外面ユビナデ	

床面完備状況



P01



P01

1. 10YR3/2 黒褐色土 粘性中・締まり中 ローム粒 45%含有
2. 10YR3/1 黒褐色土 粘性中・締まり中 ローム粒 5%含有
3. 10YR2/2 黒褐色土 粘性中・締まり中 ローム粒 5%含有
4. 10YR5/3 にぶい黄褐色土 粘性やや強、締まり強 黒褐色土粒 10%含有

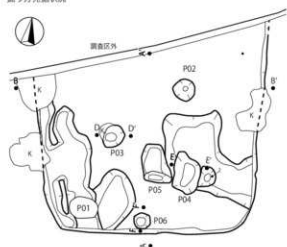
P02

- ①. 10YR3/1 黒褐色土 粘性中・締まり中 ローム粒 1%未満含有
- ②. 10YR3/2 黒褐色土 粘性中・締まり中 ロームブロック 30%含有
- ③. 10YR3/3 黒褐色土 粘性中・締まりやや弱 ロームブロック 10%含有 ※柱材抜き取り層
- ④a. 10YR4/2 灰黄褐色土 粘性中・締まり中 ロームブロック 40%含有
- ④b. 10YR4/2 灰黄褐色土 粘性中・締まり中 ロームブロック 45%含有

P05

- ①. 10YR3/1 黒褐色土 粘性中・締まり中 団状ローム 20%含有
- ②. 10YR3/4 黒褐色土 粘性中・締まり中 団状ローム 30%含有
- ③. 10YR2/2 黒褐色土 粘性中・締まり中 ロームブロック 40%含有
- ④. 10YR5/4 にぶい黄褐色土 粘性やや強、締まり強 団状ローム 40%含有

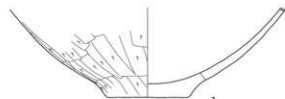
掘り方完備状況



第1号竈穴建物跡 (SI01)

1. 10YR3/2 黒褐色土 粘性中・締まり中 ロームブロック 10%・焼土粒 1%未満含有
2. 10YR3/2 黒褐色土 粘性中・締まり中 ロームブロック 20%含有
- 3a. 10YR3/3 黒褐色土 粘性中・締まり中 ロームブロック 5%含有 ※壁板面
- 3b. 10YR5/3 にぶい黄褐色土 粘性弱、締まり弱 ローム粒 40%含有 ※壁板面
- 4a. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 粘性弱、締まりやや弱 ラミナ状ローム・黒褐色土 40%含有 ※側溝
- 4b. 10YR4/4 褐色土 粘性中・締まり中 ロームブロック 30%含有 ※側溝
- 4c. 10YR5/4 にぶい黄褐色土 粘性やや強、締まり中 ラミナ状黒褐色土 20%含有 ※側溝
- 5a. 10YR3/2 黒褐色土 粘性中・締まり中 団状ローム 30%含有 ※貼床
- 5b. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 粘性やや強、締まり中 団状ローム 20%・黒褐色土ブロック 20%含有 ※貼床
- 5c. 10YR3/1 黒褐色土 粘性中・締まり中 ロームブロック 10%含有 ※貼床
- 6a. 10YR3/2 黒褐色土 粘性中・締まり中 ロームブロック 40%含有 ※掘り方埋土
- 6b. 10YR4/2 灰黄褐色土 粘性中・締まり中 黒褐色土ブロック 30%含有 ※掘り方埋土
7. 10YR3/3 黒褐色土 粘性中・締まり中 ロームブロック 20%・焼土粒 1%未満含有 ※掘り方埋土
- 8a. 10YR6/3 にぶい黄褐色土 粘性やや強、締まり強 団状ローム 30%含有 ※掘り方埋土
- 8b. 10YR5/3 にぶい黄褐色土 粘性やや強、締まり強 黒褐色土ブロック 20%含有 ※掘り方埋土

出土遺物



1



2

0 (3:2) 5cm ※ NO.2  
0 (1:3) 10cm

第7図 第1号竈穴建物跡・同出土遺物

## 第2号竪穴建物跡 (SI02) (第8～11図)

**検出位置** A区東半部に位置し、南西コーナー及び北東1/3程の部分は調査区外にかかる。

**規模** 平面形状は方形と推定され、東西4.13 m以上、南北3.84 m以上を測る。主軸は西壁基準でN-53°-Wである。

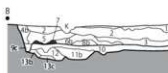
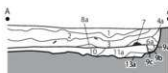
**構造** 床面はやや起伏し、外周が不規則に硬化している。壁は高さ27～31cmを測り、上部に向かって直線的に外傾し、全体的に開き気味に立ち上がる。壁際には周溝を巡らせ、規模は幅11～19cm、深さ13～16cmを測り、検出範囲内では南西コーナーを除いて全周する。床面上からは主柱穴とみられるP01、貯蔵穴とみられるP02が検出された。P01は南西部に位置し、長軸51×短軸49×深さ28cmを測り、平面形状は楕円形を呈する。土層断面には柱痕跡と考えられる第4b層が確認できる。P02は推定南東コーナー付近に位置し、北半部は調査区外にかかるが、平面形状は円形であったと思われる。規模は推定径66×深さ34cmを測る。覆土の中位には人為的な投棄とみられる焼土が多量に混入する。そのほか掘り方調査時には南東部からP03が、南壁際からP04が検出された。P03は長軸50×短軸34×深さ18cmを測る平面楕円形とみられるビットで、位置関係からP01と組になる主柱穴の可能性が高い。土層断面には柱痕跡とみられる第1層が確認できるほか、掘り込みの上部を貼床が覆っており、柱穴の一般的な埋土状況を示している。これを含めた柱穴配置は、東側の柱筋がやや内側に偏在するかたちとなるが、概ね対角線を意識して配置されたと考えられる。P04は長軸24×短軸25×深さ15cmを測る平面不整形を呈するビットで、配置的にみれば梯子穴とも考えられる。建物構築時の掘り方は、床面から6～28cmの深さを測り、壁際には幅6～28cmのテラス状の段差がある。その内側に掘り下げ部分を圍繞させ、中央部付近を方台状に掘り残している。底面には小凹凸が多数検出されたが、工具痕などは一切認められなかった。

**覆土** 暗褐色～黒褐色土を主体とする自然堆積で、大別で8層、細別で11層に分層される。床面直上に堆積する第7層は焼土を主体とし、各壁際に沿って堆積している。床面の被熱は認められず、炭化材の出土もないことから焼失が原因とは考え難く、人為的な投棄と推定する。

**遺物** 覆土上層から掘り方に至るまで、比較的密に出土した。出土層位をみると覆土上層～中層の出土が多く、個体資料が目立つ。このうち、土師器9点、石製品・石器2点を図示した。少なくとも接合関係をみる限りでは、これらの多くが本建物跡に伴うものと思われる。図示した土師器のうち、3は壺で、成・整形はかなり丁寧である。調整は内外面ともにヘラミガキで、器壁は光沢を部分的に放つ。4は鉢に分類した。体部から口縁部にかけては稜を介して屈曲して開き、口縁部も緩やかに「S」字状に湾曲する。3と同様、調整はヘラミガキで丁寧に仕上げられている。5は小型の壺で、残存する口縁部はやや外傾しながら直立し、胴部は球形を呈する。調整は外面にハケメを一次的に施し、二次調整にヨコナデやヘラナデを施すが、口縁部下半や胴部中位付近にはハケメの痕跡が残る。6・7は壺で、6が口縁部、7が底部の破片である。6は復口口縁で、内外面ともに丁寧なヘラミガキで仕上げられている。7の外面も同様である。8～11は甕である。いずれも器高20cm前後の中型製品と思われる。胴部中位に最大径をもつ。胴部の張りりは8・10が小さく、9・11が大きく張る。底部は11のみに残存し、小さな平底を呈する。甕の外面調整は8・9がハケメ、10・11がヘラナデもしくはヘラケズリで、8のみキザミ状の押圧を口唇端部に連続的に施す。12・13は石製品・石器で、12は砥石である。板状肌理にて剥落した原石を未加工のまま素材とし、砥面は1面のみ確認されるが、その表面が平滑化するほど入念に使い込まれている。砥面には刃器との接触により生じた線状痕が多数残存する。13は台石である。使用痕は表裏両面に認められ、部分的に敲打痕も観察される。周囲に認められる剥離痕は、素材加工時の造作とみられる。

**時期** 出土遺物の様相から、古墳時代前期と推定される。

床面完備状況



P01

1. 10YR3/2 黒褐色土
- 2a. 10YR3/4 暗褐色土
- 2b. 10YR4/2 灰黄褐色土
- 2c. 10YR4/3 にぶい黄褐色土
3. 10YR4/3 にぶい黄褐色土
4. 10YR3/2 黒褐色土

粘性中・締まり中 ローム粒 5%・斑状褐色土 15% 含有  
 粘性中・締まり中 ローム粒 5% 含有  
 粘性中・締まりやや弱 ロームブロック 40%・黒色土ブロック 10% 含有  
 粘性中・締まりやや弱 特記すべき含有物なし  
 粘性中・締まり中 ロームブロック 30% 含有  
 粘性中・締まり中 ロームブロック 40% 含有  
 ※柱腐跡

P02

1. 10YR3/2 黒褐色土
2. 10YR3/1 黒褐色土
3. 10YR4/2 灰黄褐色土
- 4a. 10YR3/3 暗褐色土
- 4b. 5YR4/2 灰褐色土
5. 10YR4/2 灰黄褐色土

粘性中・締まりやや弱 ロームブロック 30% (下位に集中) 含有  
 粘性中・締まりやや弱 ローム粒 5% 含有  
 粘性中・締まり中 ロームブロック 50% 含有  
 粘性中・締まり中 ロームブロック 20% 含有  
 粘性中・締まり中 斑土ブロック 50% 含有  
 粘性強・締まり強 斑状ローム 20%・粘土ブロック 5% 含有

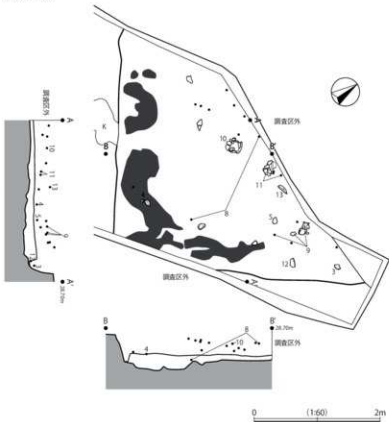
第2号竪穴建物跡 (SIG2)

1. 10YR3/2 黒褐色土  
粘性中・締まりやや弱 ローム粒 1% 未調査  
斑状褐色土 10% 含有  
粘性中・締まり中 ローム粒 1% 未調査含有  
粘性中・締まり中 ロームブロック 30% 含有  
粘性中・締まり弱 ロームブロック 30%・黒色土ブロック 20% 含有  
粘性中・締まりやや弱 ロームブロック 5%・斑状褐色土 30% 含有  
粘性中・締まり中 ローム粒 5%・粘土粒 5% (下位に集中) 含有  
粘性中・締まりやや弱 斑状褐色土 15%・斑土ブロック 5% 含有
2. 10YR3/3 暗褐色土
3. 10YR3/1 黒褐色土
- 4a. 10YR5/3 にぶい黄褐色土
- 4b. 10YR3/3 暗褐色土
5. 10YR2/1 黒色土
- 6a. 5YR4/2 灰褐色土
- 6b. 10YR3/3 暗褐色土
7. 5YR3/1 黒褐色土
- 8a. 10YR3/3 暗褐色土
- 8b. 10YR3/2 黒褐色土
- 9a. 10YR5/4 にぶい黄褐色土
- 9b. 10YR4/2 灰黄褐色土
- 9c. 10YR5/3 にぶい黄褐色土
10. 10YR3/1 黒褐色土
- 11a. 10YR3/2 黒褐色土
- 11b. 10YR3/2 黒褐色土
12. 10YR3/1 黒褐色土
- 13a. 10YR6/4 にぶい黄褐色土
- 13b. 10YR4/2 灰黄褐色土
- 13c. 10YR6/4 にぶい黄褐色土

粘性中・締まり中 ロームブロック 10% 含有  
 粘性中・締まり中 斑土ブロック 50% 含有  
 粘性中・締まり中 ローム粒 1% 未調査含有  
 粘性中・締まり中 ローム粒 5%・黒色土ブロック 5% 含有  
 粘性中・締まり中 ロームブロック 30% 含有  
 粘性中・締まり中 ローム粒 10%・黒色土粒 40% 含有 ※炭屑  
 粘性中・締まり中 ロームブロック 40% 含有  
 ※炭屑  
 粘性中・締まりやや強 ロームブロック 20%・斑状褐色土 10% 含有 ※炭屑  
 粘性中・締まりやや強 ロームブロック 10%・黒色土ブロック 1% 未調査含有 ※炭屑方塊土  
 粘性中・締まりやや強 ロームブロック 30%・斑状褐色土 5% 含有 ※炭屑方塊土  
 粘性中・締まりやや強 ロームブロック 20%・黒色土ブロック 5% 含有 ※炭屑方塊土  
 粘性やや強・締まり強 斑状褐色土 30% 含有 ※炭屑方塊土  
 粘性中・締まりやや強 ロームブロック 30%・斑状褐色土 20% 含有 ※炭屑方塊土  
 粘性やや強・締まり強 斑状褐色土 30% 含有 ※炭屑方塊土  
 粘性中・締まり強 斑状褐色土 40% 含有 ※炭屑方塊土

■ 粘土範囲

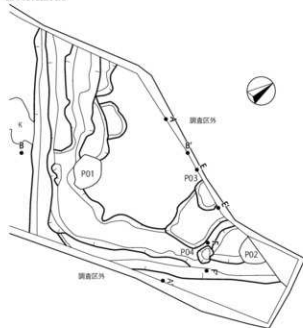
遺物出土状況



第8図 第2号竪穴建物跡 (1)



掘り方充層状況



PO3

- ① 10YR2/1 黒色土
- ② 10YR3/2 黒褐色土
- ③ 10YR3/2 黒褐色土
- 1a 10YR3/1 黒褐色土
- 1b 10YR3/1 黒褐色土
- 2 10YR2/1 黒色土
- 3 10YR4/3 にぶい黄褐色土

粘性やや強・締まり強 ローム粒 1%未満含有  
※柱礎跡  
粘性やや強・締まり強 ロームブロック 30%含有 ※柱礎掘り方埋土  
粘性中・締まりやや強 ロームブロック 10%含有 ※柱礎掘り方埋土  
粘性中・締まり中 斑状 ローム 40%含有 ※柱礎跡  
粘性中・締まり中 斑状 ローム 20%含有 ※柱礎跡  
粘性中・締まりやや強 ロームブロック 30%含有  
粘性やや強・締まりやや強 ロームブロック 30%・黒色土ブロック 5%含有

PO4

- 1 10YR4/2 灰黄褐色土
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐色土

粘性やや強・締まり強 ロームブロック 30%黒褐色土ブロック 20%含有  
粘性中・締まり弱 ロームブロック 20%含有

第9図 第2号竪穴建物跡(2)

第4表 第2号竪穴建物跡出土土器観察表

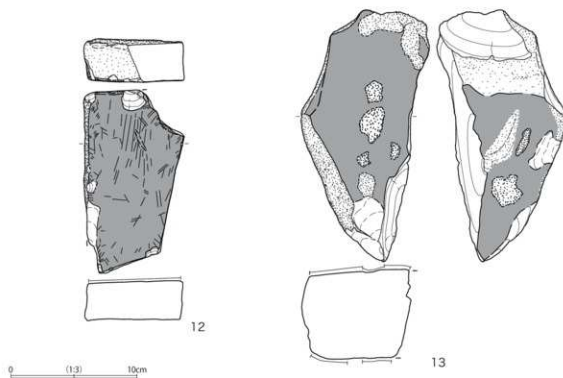
図版	通番	出土地点 遺構	器種	法量 (cm)			焼成	胎土 鉱物	色調	調整
				口径	底径	器高				
10	3	SI02	土師器碗	(12.8)	2.2	5.3	良好	砂粒, 長石, 石英 ガラス状透明粒子 赤色鉱物	外面: 10YR5/2 灰黄褐色 内面: 10YR6/3 にぶい黄褐色	外面: 口縁部ココナデ, 体部ヘラミガキ, 底部ヘラケズリ 内面: 口縁部ヘラナデ, 体~底部ヘラミガキ (底部火欠)
10	4	SI02	土師器鉢	(15.2)	(2.8)	5.1	良好	砂粒, 長石, 石英 ガラス状透明粒子 小礫	外面: 10YR5/6 黄褐色 内面: 10YR5/4 にぶい黄褐色	外面: 口縁~体部ヘラミガキ, 底部ヘラケズリ 内面: 口縁~底部ヘラミガキ (火欠顕著)
10	5	SI02	土師器碗	10.0	-	[11.7]	良好	砂粒, 雲母, 小礫	外面: 7.5YR5/6 明褐色 内面: 7.5YR6/6 棕色	外面: 口縁部ハケメ後上半ココナデ, 胴部ハケメ後ヘラナデ 内面: 口縁部ヘラナデ後上半ココナデ, 胴部ヘラナデ (胴部上半輪痕残存)
10	6	SI02	土師器碗	(17.6)	-	[6.0]	良好	砂粒, 石英, 雲母 ガラス状透明粒子	外面: 7.5YR5/6 明褐色 内面: 5YR5/6 明赤褐色	外面: 口縁部ヘラミガキ 内面: 口縁部ヘラミガキ
10	7	SI02	土師器碗	-	5.6	[2.6]	普通	砂粒, 長石, 石英 ガラス状透明粒子 雲母, 小礫	外面: 7.5YR5/4 にぶい褐色 内面: 7.5YR6/6 棕色	外面: 胴部ヘラミガキ, 底部ヘラケズリ 内面: 胴~底部ヘラナデ
10	8	SI02	土師器甕	(16.3)	-	[6.9]	普通	砂粒, 長石, 石英 ガラス状透明粒子 雲母, 小礫	外面: 7.5YR7/6 棕色 内面: 7.5YR6/6 棕色	外面: 口縁部ココナデ, 胴部ハケメ (口縁部部分にケズリ状の凹み) 内面: 口縁~胴部ヘラナデ
10	9	SI02	土師器甕	(14.2)	-	[15.7]	普通	砂粒, 石英, 片岩 ガラス状透明粒子	外面: 5YR5/6 明赤褐色 (全体に煤付着) 内面: 5YR5/6 明赤褐色	外面: 口縁部ハケメ後ココナデ, 胴部ハケメ 内面: 口縁部ココナデ, 胴部ヘラナデ (胴部部分に輪痕残存)
10	10	SI02	土師器甕	18.0	-	[18.8]	普通	砂粒, 長石, 石英 ガラス状透明粒子 赤色鉱物	外面: 10YR4/2 灰黄褐色 内面: 10YR5/4 にぶい黄褐色	外面: 口縁部ハケメ後ココナデ, 胴部ヘラケズリ・エビナデ 内面: 口縁部ココナデ, 胴部ヘラナデ (胴部に輪痕・凹み残存)
10	11	SI02	土師器甕	18.0	5.6	25.5	普通	砂粒, 長石, 石英 雲母, 小礫	外面: 10YR5/3 にぶい黄褐色 (口縁全体に煤付着) 内面: 10YR6/4 にぶい黄褐色	外面: 口縁部ココナデ, 胴部ヘラナデ 内面: 口縁部ココナデ, 胴部ヘラナデ (胴部全体に輪痕残存)

第5表 第2号竪穴建物跡出土石製品・石器観察表

図版	通番	出土地点 遺構	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
11	12	SI02	砥石	14.5	8.0	3.5	622.2	砂質製, 板状製法にて形成された砥石をそのまま素材とし, 砥面は表面のみを使用, 粗かな砥状痕が観察されるほか, 縁辺は部分的に潤滑される
11	13	SI02	台石	20.0	10.2	7.1	1736.1	磨石製, 原石の二辺を打ち欠いて素材とし, 表面二面の使用面には磨痕及び部分的に磨打痕が観察される



第10图 第2号竖穴建物跡出土遺物(1)



第11図 第2号竪穴建物跡出土遺物(2)

### 第3号竪穴建物跡 (S103) (第12・13図)

**検出位置** B区北半部に位置し、北西1/3程の部分は調査区外にかかる。第4号竪穴建物跡と入れ子状に重なり、同建物跡よりも新しい。第4号竪穴建物跡の覆土除去時に床面硬化部分とが跡が検出され、新規で確認された建物跡である。

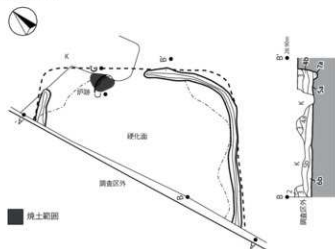
**規模** 平面形状は方形と推定され、東西2.55m以上、南北3.21m以上を測る。主軸はが跡の方向基準でN-43°-Wである。

**構造** 床面はやや起伏し、ほぼ全面が硬化する。壁は調査区壁の断面や残存部分でみると、高さ20～31cmを測り、垂直気味に立ち上がる。壁際には周溝を巡らせ、規模は幅11～16cm、深さ7～10cm、検出範囲内では東壁の北半部を除いて全周する。床面施設に柱穴や貯蔵穴は認められず、が跡が東壁際から検出された。残存部で長軸26×短軸23×深さ3cmを測り、地床がであったと思われる。がの内外は強く被熱し、全体的に硬く焼け締まっている。建物構築時の掘り方は伴わず、第4号竪穴建物跡の覆土を直接踏み固めて床面としている。また、北壁の一部は同建物跡の壁を共有していた可能性もある。このことから埋設途中の同建物跡の窪地を利用し、本建物跡が構築されたと推定する。

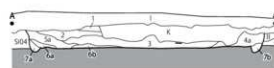
**覆土** 暗褐色～黒褐色土を主体とする自然堆積で、大別で6層、細別で9層に分層される。大半が攪乱を受け、残存は不良である。

**遺物** 中央部付近から東寄りにかけて集中的に出土した。層位としては大半が中層以下の出土であり、いずれも本建物跡への帰属性は高いものと考えられる。図示したのは土師器6点で、14は器高5cm程度と推定される、ミニチュア土器とも呼ぶべき小型の壺である。胴部は扁平で、底部は平底である。器面は摩滅するが、ヘラミガキやユビナデの痕跡が観察される。外面には顔料が点在する。15は壺で、口縁部は複合口縁である。内外面ともに丁寧なヘラミガキ調整で仕上げられている。16～18は甕で、16・17は口縁部付近のみの残存であるが、18は全体の器形が復元できる。胴部は球状に張り出し、底部は小さな平底である。外面調整は16・17がハケメ主体、18がヘラケズリ主体である。いずれも口縁部はヨコナデにより二次調整される。また、18の口唇端部にはキザミ状の押圧を連続的に施す。19は、残存器高42.8cmを測る大型の壺である。胴部1/5周が残存し、

床面完備状況



遺物出土状況



第3号竪穴建物跡 (S03)

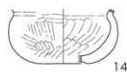
1. 10YR3/2 黒褐色土 粘性中・締まり中 ローム粒 1%未滿含有
2. 10YR3/3 暗褐色土 粘性中・締まり中 ローム粒 1%未滿含有
3. 10YR2/2 黒褐色土 粘性中・締まり中 ローム粒 5%・現状黒色土 10%含有
- 4a. 10YR3/3 暗褐色土 粘性中・締まり中 ローム粒 1%未滿含有
- 4b. 10YR3/2 黒褐色土 粘性中・締まり中 ローム粒 1%未滿・現状黒色土 5%含有
- 5a. 10YR3/2 黒褐色土 粘性中・締まり中 現状ローム 20%含有
- 5b. 10YR2/2 黒褐色土 粘性中・締まり中 ローム粒 5%含有
- 6a. 10YR3/3 暗褐色土 粘性中・締まり中 現状ローム 30%含有
- 6b. 10YR3/3 暗褐色土 粘性中・締まり中 ローム粒 5%含有
- 7a. 10YR3/1 黒褐色土 粘性中・締まり中 ローム粒 5%含有 ※南溝
- 7b. 10YR3/3 暗褐色土 粘性中・締まり中 現状ローム 40%含有 ※南溝

伊勢

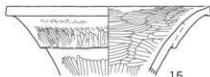
1. 5YR4/3 に近い赤褐色土 粘性中・締まり中 黒褐色土粒 1%未滿・  
黄土ブロック 20%含有

0 (1/60) 2m

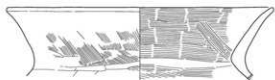
出土遺物



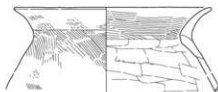
14



15

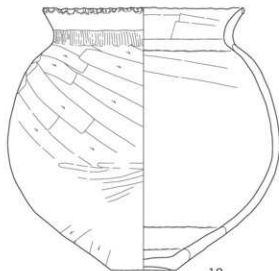


16



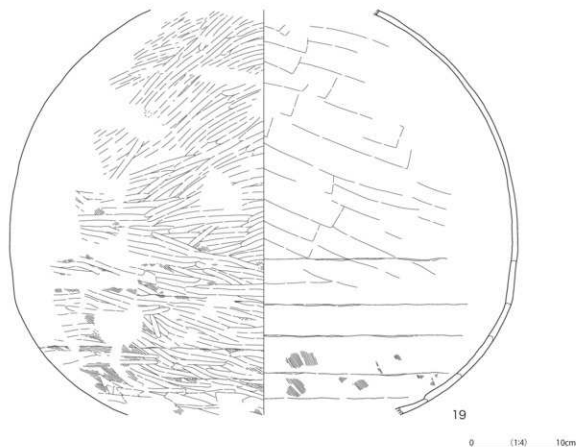
17

0 (1/3) 10cm



18

第12図 第3号竪穴建物跡・同出土遺物(1)



第 13 図 第 3 号竪穴建物跡出土遺物 (2)

第 6 表 第 3 号竪穴建物跡出土土器観察表

図版	遺番	出土地点 遺構	器種	法量 (cm)			焼成	胎土 鉱物	色調	調整
				口径	底径	高さ				
12	14	S103	土師器壺	-	(4.0)	[4.4]	普通	砂粒、石英 ガラス状透明粒子	外面：7.5YR4/2 灰褐色 (黄色顔料点入) 内面：10YR5/2 灰黄褐色	外面：胴部ヘラミガキ、底部ヘラケズリ 内面：胴～底部ユビナデ (摩滅のため不明瞭)
12	15	S103	土師器壺	(16.0)	-	[5.7]	良好	砂粒、石英、雲母	外面：10YR6/6 明黄褐色 内面：10YR6/4 にふい黄 褐色 (下部に厚付着)	外面：口縁部ハケメ後ヘラミガキ 内面：口縁部ヘラミガキ
12	16	S103	土師器壺	(21.0)	-	[5.8]	普通	砂粒、長石、石英 雲母、チャート	外面：7.5YR6/6 褐色 内面：10YR6/4 にふい黄 褐色	外面：口縁部ハケメ後ココナデ (胴部強いヘラナデで段状に挟る) 内面：口縁部ハケメ
12	17	S103	土師器壺	(15.6)	-	[6.8]	普通	砂粒、長石、石英 雲母、チャート	外面：10YR3/2 黒褐色 内面：7.5YR4/4 褐色	外面：口縁部ハケメ後ココナデ、胴部ハケメ 内面：口縁部ハケメ後ココナデ、胴部ヘラナデ
12	18	S103	土師器壺	15.8	5.2	20.8	普通	砂粒、長石、石英 雲母	外面：10YR4/2 灰黄褐色 (全体に薄く厚付着) 内面：10YR4/2 灰黄褐色	外面：口縁部ハケメ後半ココナデ、胴部ヘラケズリ・ヘラ ミガキ (口縁端にキザと状の押し通し) 内面：口縁～胴部ヘラナデ (胴部に輪痕状残存)
13	19	S103	土師器壺	-	-	[42.8]	普通	砂粒、石英、雲母 片岩	外面：10YR6/6 明黄褐色 (一部厚付着) 内面：10YR5/4 にふい黄 褐色	外面：胴部ハケメ後ユビナデ・ヘラミガキ 内面：胴部ハケメ後ヘラナデ (胴部下半に輪痕状残存)

器形は下位に最大径をもつ。ほかに同一個体とみられる非接合の破片は 30 点を確認したが、全て胴部で、口縁部や底部は見当たらなかった。一次調整は内外面ともにハケメを施し、二次調整は外面がユビナデ・ヘラミガキ、内面がヘラナデである。内面の下半部には輪痕状が残存する。

時期 炉跡を伴う特徴や、出土遺物から、古墳時代前期と推定される。

#### 第4号竪穴建物跡 (S104) (第14～16図)

**検出位置** B区北半部に位置し、北西1/3程の部分は調査区外にかかる。北半部には第3号竪穴建物跡が入れ子状に重複するが、床面はその破壊を免れている。

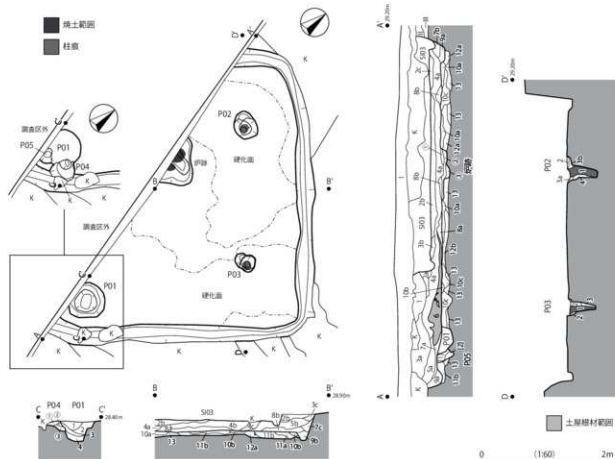
**規模** 平面形状は方形と推定され、東西4.26m以上、南北4.61mを測る。主軸は竪跡の方向基準でN-54°-Wである。

**構造** 床面はやや起伏し、壁際の一部と竪跡の外周を除く大半が硬化している。壁は高さ16～29cmを測り、上部に向かって直線的に外傾しながら立ち上がる。壁際には周溝を巡らせ、規模は幅13～28cm、深さ9～13cmを測り、検出範囲内では全周する。床面上からは竪跡のほか、貯蔵穴とみられるP01、主柱穴とみられるP02・03と、P01に重複してP04・05が検出された。竪跡は中央部からやや北寄りに位置し、西側1/2程が調査区外にかかるが、長軸76×短軸49cmの範囲が検出された。浅く掘り込まれた地床がで、平面形状は方形もしくは長方形と推定され、深さは11cm前後を測る。底面の一部は深さ5cm程の小ピット状に掘り窪められている。被熱は弱く、底面の一部が薄く焼土化している程度である。P01は推定南西コーナー付近に位置し、西端部は調査区外にかかる。規模は検出範囲内で長軸56×短軸50×深さ32cmを測り、平面形状は円形と推定される。P02・03は対角線上に4基配置された主柱穴のうち東側の柱筋に相当すると思われ、北側のP02が長軸37×短軸33×深さ48cm、南側のP03が長軸27×短軸25×深さ44cmを測る。ともに平面形状は円形で、上部にテラス状の浅い張り出し部が伴う。断面形状は漏斗状を呈し、土層断面で確認された柱痕跡(直径14cm程度)との隙間を極力抑えた形状となっている。P04・05はP01や周溝との重複で部分的に破壊されるが、規模はP04で長軸40×短軸34×深さ11cm、P05で長軸24×短軸18×深さ24cmを検出した。ともに平面形状は円形であったと推定される。そのほか、掘り方調査時に南壁際からP06が検出された。長軸40×短軸32×深さ34cmを測り、平面形状は楕円形を呈する。掘り込みは急峻で深く、位置的に梯子穴とも考えられる。建物構築時の掘り方は、床面から6～16cmの深さを測り、壁際には幅9～36cmのテラス状の段差がある。中央部付近は方台状に掘り残され、外周に圍繞させた掘り下げ部分は幅広である。底面には小凹凸が多数検出されたが、工具痕などは一切認められなかった。

**覆土** 暗褐色～黒褐色土を主体とする自然堆積で、大別で8層、細別で17層に分層される。床面直上の第6層は土層根材の崩落による堆積と思われる、ロームと黒褐色土が入り混じったような層相を呈する。この層は、平面的にみると南壁沿いに帯状の範囲で分布する。

**遺物** 散在的な出土状況を示すが、層位では覆土下層～床面直上の出土が多い。このため、大半が本建物跡に直接伴う遺物と考えられ、土師器5点を図示した。20・21は器台で、20は小さな受部が残存する破片資料である。内外面にはヘラミガキの痕跡が観察される。21は脚部で、裾部まで直線的に開く。上位には透孔が3箇所穿たれている。調整は外面ヘラミガキ、内面ヘラナデである。22～24は甕である。22・24は胴部中位に、23は胴部上位に最大径をもつ。外面調整はいずれもハケメを一次的に施し、二次調整は口縁部がヨコナデ、22のみ胴部の中位以下にヘラナデを施す。内面調整は22が口縁部にハケメ、胴部にヘラナデ、23は口縁部から胴部上位にかけてヘラナデを施すが、それ以下の調整痕は不明瞭である。24は全体にハケメを一次的に施し、その後口縁部にヨコナデを施す。22・23の内面には輪積痕が残存する。

**時期** 竪跡を伴う特徴や、出土遺物の様相から、古墳時代前期と推定される。重複する第3号建物跡との間には、大幅な時期差は認められなかった。



- 第4号竪穴建物跡 (SI04)
- 10YR3/1 黒褐色土
  - 2a. 10YR3/2 黒褐色土
  - 2b. 10YR3/1 黒褐色土
- 2c. 10YR3/3 暗褐色土
- 3a. 10YR3/2 黒褐色土
  - 3b. 10YR3/3 暗褐色土
  - 4a. 10YR2/1 黒色土
- 4b. 10YR2/2 黒褐色土
  - 4c. 10YR3/3 暗褐色土
  - 5a. 10YR3/1 黒褐色土
  - 5b. 10YR3/1 黒褐色土
  6. 10YR3/4 暗褐色土
- 7a. 10YR3/2 黒褐色土
  - 7b. 2.5Y/4 灰黄色土
  - 7c. 10YR5/3 に近い黄褐色土
  - 8a. 2.5Y/3 黄褐色土
  - 8b. 2.5Y/2 黒褐色土
  - 9a. 10YR2/2 黒褐色土
  - 9b. 10YR5/4 に近い黄褐色土
  - 10a. 10YR3/3 暗褐色土
  - 10b. 10YR3/1 黒褐色土
  - 10c. 10YR4/1 褐色土
  - 11a. 10YR4/2 灰黄褐色土
  - 11b. 10YR5/4 に近い黄褐色土
  - 12a. 10YR6/4 に近い黄褐色土
  - 12b. 10YR4/2 灰黄褐色土
  13. 10YR6/3 に近い黄褐色土
- 伊跡
1. 10YR2/1 黒色土
  2. 2.5Y/3 に近い黄褐色土
  3. 10YR7/4 に近い黄褐色土

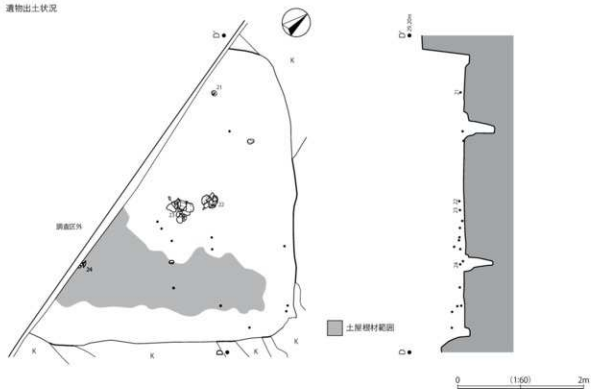
- 粘性中・締まりやや弱 黒褐色土ブロック 20%含有
- 粘性中・締まり中 斑状ローム 5%含有
- 粘性中・締まりやや強 ロームブロック 5%・焼土粒 1%未満 (伊跡上) 含有
- 粘性中・締まりやや強 ラミナ状ローム 30% (一部ブロック状) 含有
- 粘性中・締まり中 (きめ細かく均質) ローム粒 1%未満含有
- 粘性中・締まりやや強 斑状ローム 30%含有
- 粘性中・締まり中 ロームブロック 30% (南端付近に集中)・焼土粒 1%未満 (伊跡上) 含有
- 粘性中・締まりやや弱 (きめ細かく均質) ローム粒 5%含有
- 粘性中・締まり中 ラミナ状ローム 20%含有
- 粘性中・締まりやや弱 ローム粒 1%未満含有
- 粘性中・締まり中 ロームブロック 5%含有
- 粘性中・締まり中 ロームブロック 20%・黒色土粒 30%含有 ※土層材目録参照
- 粘性中・締まりやや弱 ロームブロック 5%含有
- 粘性やや強・締まり強 斑状ローム 30%含有
- 粘性中・締まり中 ロームブロック 20%含有
- 粘性やや強・締まり中 ロームブロック 30%含有
- 粘性やや強・締まり強 斑状ローム 30%含有
- 粘性中・締まり中 ロームブロック 20%含有 ※周溝
- 粘性中・締まり中 ロームブロック 30%・斑状黒褐色土 10%含有 ※粘床
- 粘性中・締まりやや強 ロームブロック 30%・斑状黒色土 10%含有 ※粘床
- 粘性中・締まり強 ロームブロック 10%含有 ※粘床
- 粘性強・締まり強 ロームブロック 30%・斑状黒褐色土 10%含有 ※粘床
- 粘性中や強・締まり強 ロームブロック 15%・黒色土ブロック 5%含有 ※断面方理土
- 粘性やや強・締まり強 ロームブロック 20%・黒色土ブロック 10%含有 ※断面方理土
- 粘性中・締まり強 ロームブロック 40%含有 ※断面方理土
- 粘性強・締まり強 ラミナ状ローム・黒褐色土 50%含有 ※断面方理土
- 粘性強・締まり強 ロームブロック 30%・黒色土ブロック 10%含有 ※断面方理土

- P01
1. 10YR3/2 黒褐色土
  2. 10YR3/3 暗褐色土
  3. 10YR4/2 灰黄褐色土
  4. 10YR5/3 に近い黄褐色土
- P02
1. 10YR4/1 褐色土
  2. 10YR3/3 暗褐色土
- 3a. 10YR4/2 灰黄褐色土
  - 3b. 10YR5/3 に近い黄褐色土
  4. 10YR6/4 に近い黄褐色土
- P03
1. 10YR4/2 灰黄褐色土
  2. 10YR4/3 に近い黄褐色土
  3. 10YR4/1 褐色土
- P04
- ①. 10YR3/2 黒褐色土
  - ②. 10YR3/1 黒褐色土
  - ③. 10YR3/2 暗褐色土
- P05
- [1]. 10YR3/2 黒褐色土
  - [2]. 10YR3/1 黒褐色土

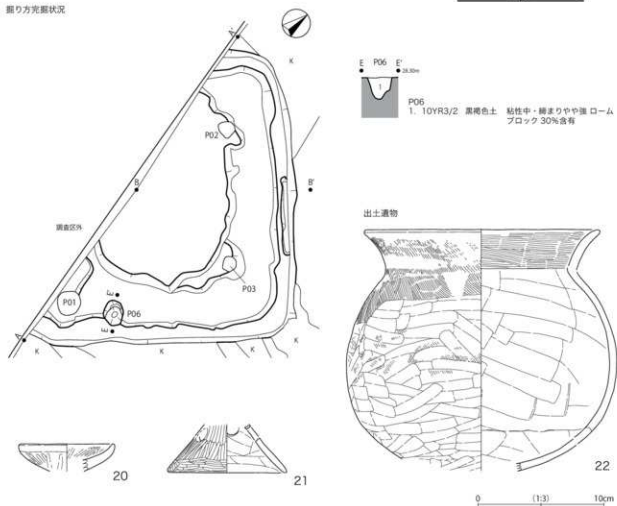
- 粘性中・締まりやや弱 ロームブロック 5%含有
- 粘性中・締まり中 斑状ローム 30%含有
- 粘性中・締まり中 斑状ローム 20%含有
- 粘性やや強・締まり強 斑状ローム 5%含有
- 粘性中・締まり強 斑状黒褐色土 20%含有
- 粘性中・締まりやや弱 ロームブロック 5%・炭化物粒 5%含有 ※柱痕跡
- 粘性中・締まり中 ロームブロック 10%含有
- 粘性やや強・締まり強 斑状ローム 40%・黒褐色土ブロック 5%含有
- 粘性やや強・締まり強 ロームブロック 45%含有
- 粘性強・締まり強 斑状黒褐色土 10%含有
- 粘性中・締まりやや弱 ロームブロック 20%・炭化物粒 1%未満含有 ※柱痕跡
- 粘性中・締まり中 ロームブロック 45%含有
- 粘性中・締まり強 斑状ローム 10%含有
- 粘性中・締まり強 ロームブロック 45%含有
- 粘性中・締まり強 ロームブロック 30%含有
- 粘性中・締まり中 ロームブロック 40%含有
- 粘性中・締まりやや弱 ローム粒 5%含有
- 粘性中・締まりやや弱 ローム粒 10%含有

第14図 第4号竪穴建物跡(1)

遺物出土状況

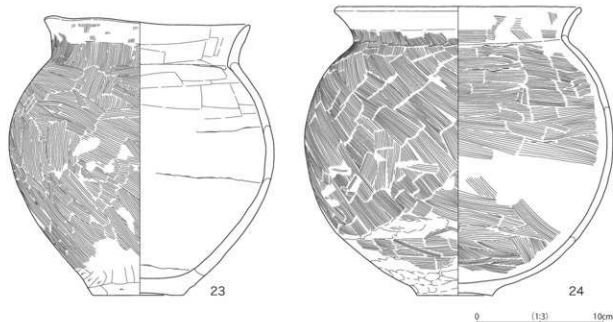


掘り方完形状況



第15図 第4号竪穴建物跡(2)・同出土遺物(1)





第16図 第4号竪穴建物跡出土遺物(2)

第7表 第4号竪穴建物跡出土土器観察表

図版	遺物番号	出土地点 遺構	器種	法量 (cm)			焼成	胎土 藍物	色調	調整
				口径	底径	器高				
15	20	SI04	土師器部台	(7.4)	-	[2.1]	普通	砂粒, 珩石, 石英 雲母	外面: 5YR4/8 赤褐色 内面: 5YR4/8 赤褐色	外面: 口縁部ココナデ, 受部ヘラミガキ 内面: 口縁部ココナデ? 受部ヘラミガキ (摩滅のため不明)
15	21	SI04	土師器部台	-	9.3	[3.8]	良好	砂粒, 石英 ガラス状透明粒子 チャート	外面: 5YR5/6 明赤褐色 内面: 5YR5/6 明赤褐色	外面: 脚~胴部ヘラミガキ 内面: 脚~胴部ヘラナデ (穿孔時の粘土塊残存)
15	22	SI04	土師器壺	(18.6)	-	[19.1]	普通	砂粒, 石英 ガラス状透明粒子 チャート	外面: 10YR5/4 にぶい黄 褐色 (全体に厚付着) 内面: 7.5YR5/4 にぶい 褐色	外面: 口縁部ハケメ後一部ココナデ, 胴部ハケメ後中心以下 ヘラナデ 内面: 口縁部ハケメ, 胴部ヘラナデ
16	23	SI04	土師器壺	16.2	7.2	22.1	良好	砂粒, 珩石, 雲母	外面: 5YR5/4 にぶい赤 褐色 (胴部中に 厚付着) 内面: 7.5YR6/6 橙色	外面: 口縁部ハケメ後上半ココナデ, 胴部ハケメ, 底部ヘラ ケズリ 内面: 口縁~胴部ヘラナデ (胴部中に輪痕残存)
16	24	SI04	土師器壺	(10.0)	(6.0)	22.9	普通	砂粒, 珩石, 石英 チャート 赤色藍物	外面: 7.5YR6/4 にぶい 橙色 (胴部下半に 厚付着) 内面: 10YR7/4 にぶい黄 褐色 (胴部下半に 厚付着)	外面: 口縁部ハケメ後上半ココナデ, 胴部ハケメ, 底部エゼ ナデ 内面: 口縁部ハケメ後上半ココナデ, 胴~底部ハケメ

第1号ピット (P01) (第17図)

検出位置 A区南西部に位置し, 南端部は調査区外にかかる。

規模 平面形状は楕円形と推定され, 検出範囲での長軸42×短軸33×深さ14cmを測る。

構造 断面形状は皿状を呈し, 北壁にはテラス状の段差がある。

覆土 黒褐色土上の単一層で, 自然堆積と思われる。断面に柱痕跡などは認められなかった。

遺物 出土しなかった。

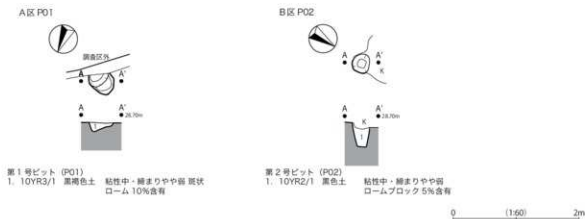
時期 不明。

第2号ピット (P02) (第17図)

検出位置 B区南東部に位置する。上部は大半が攪乱されている。

規模 残存部での平面形状はやや歪んだ円形を呈するが, 底面は方形であり, 本来の上端は隅丸方形であったと推定される。規模は現況で長軸30×短軸27×深さ38cmを測る。

- 構造** 断面形状は逆台形を呈するが、壁の角度はかなり急である。
- 覆土** 黒色土の単一層で、自然堆積と思われる。断面に柱痕跡などは認められなかった。
- 遺物** 出土しなかった。
- 時期** 不明。

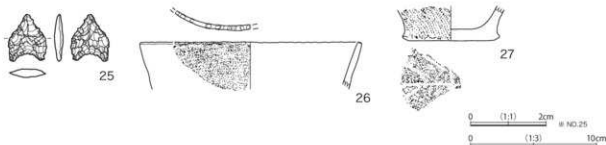


第17図 第1・2号ピット

**遺構外遺物 (第18図)**

ここでは、竪穴建物跡の覆土に混入していた遺物のうち、遺構とは別時代のものを選択して掲載する。

25は石鏝である。長1.2cmの小型製品で、チャート製である。縄文時代の所産と思われる。26・27は弥生土器の壺で、26の外面には附加条一種の縄文が施文されるが、軸縄の圧痕は残存しない。口唇端部には縄文原体による押圧が連続する。27の外面にも附加条の縄文が施文され、26とは異なり軸縄及び附加条の圧痕が明確に残る。底部には木葉痕が観察される。これらの弥生土器は、後期後半・十王台式期の所産と考えられる。



第18図 遺構外出土遺物

第8表 遺構外出土石器観察表

図版	通番	出土地点	遺構	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
18	25	遺構外	石鏝		1.2	1.0	0.2	0.2	チャート製、小型の円形製品で、表面ともに連続的な押圧痕跡で観察される

第9表 遺構外出土土器観察表

図版	通番	出土地点	遺構	器種	流量 (cm)			焼成	胎土 磁物	色調	調整
					口径	底径	器高				
18	26	遺構外	弥生土器壺	(17.6)	-	[3.7]	不貞	砂紀、長石、石英 ガラス状透明粒子	外面：10YR4/3 赤い黄 褐色 内面：2.5Y7/3 浅黄色	附加条一種（1条）の縄文を施文。口唇端部に縄文原体による押圧痕跡	
18	27	遺構外	弥生土器壺	-	(12.7)	[2.8]	不貞	砂紀、石英 ガラス状透明粒子	外面：2.5Y3/1 黒褐色 内面：2.5Y5/3 黄褐色	附加条一種（1条）の縄文を施文。底面外面に木葉痕残存	

第10表 第15地点出土遺物総量

出土地点	A区一括			B区一括			SI01			SI02			SI03			SI04			総点数	総重量(g)	
	点数	個体数	重量(g)	点数	個体数	重量(g)	点数	個体数	重量(g)	点数	個体数	重量(g)	点数	個体数	重量(g)	点数	個体数	重量(g)			
縄文	深鉢	0	0	0	1	1	10.9	0	0	0	0	0	3	3	12.9	0	0	0	4	24	
弥生	鉢	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	8.6	0	0	0	1	8.6	
	壺	3	3	22.6	6	6	38.4	0	0	0	6	6	39.7	1	1	5.2	9	9	101.5	25	207.4
土師器	椀	0	0	0	1	1	17	0	0	0	7	6	159.2	5	2	41.7	1	1	2.0	14	219.5
	鉢	0	0	0	0	0	0	0	0	9	5	150.6	6	4	20.0	1	1	3.0	16	173.6	
	高坏	0	0	0	1	1	4.0	0	0	0	5	3	14.6	0	0	0	1	1	5.4	7	24.0
	器台	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	7.1	0	0	0	5	2	83.8	6	90.9	
	甕	7	7	54.5	13	8	200.2	4	2	11.6	47	37	632.4	135	30	2,502.3	22	15	246.8	228	3,647.8
	甕	14	11	114.8	38	33	284.5	21	8	333.3	314	104	3,754.4	182	112	2,014.2	115	30	5,279.5	684	11,780.7
須恵器	瓶	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	6.5	0	0	0	1	6.5	
	坏	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	2.1	0	0	0	1	2.1	
須恵器	短頸壺	0	0	0	1	1	8.6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	8.6	
	埴輪	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	19.1	0	0	0	1	19.1	
	陶磁器	0	0	0	2	2	7.8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	7.8	
	土製品	0	0	0	0	0	0	1	1	24.6	0	0	0	0	0	0	0	0	1	24.6	
	粘土塊	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	3.3	1	3.3	
石器・石製品		1	1	11.1	1	1	1.1	0	0	0	3	3	2,377.6	0	0	0	1	1	0.2	6	2,390.0
	礫	0	0	0	1	1	9.5	0	0	0	5	5	3,064.8	0	0	0	2	2	735.8	8	3,810.1
総計		25	22	203.0	65	55	581.6	26	11	369.5	397	170	10,200.4	336	156	4,632.6	158	63	6,461.3	1,007	22,448.4

また、第10表に示した通り、図示した以外にも様々な遺物が出土している。いずれも小破片で出土量も少ないが、縄文土器深鉢、弥生土器鉢・壺、須恵器坏・短頸壺、埴輪、陶磁器が認められた。土器類は周辺に本来帰属すべき集落の存在を示唆し、実際に町付遺跡第1地点の調査では弥生時代後期後半と平安時代の竪穴建物跡がそれぞれ検出されている。埴輪は遺跡内に位置する谷田古墳群からのものであろう。同古墳群では埴輪を使用した古墳が皆無とされてきたが、今後その見解が覆る期待がもたれる。

(吉澤)

## IV 総括

今回検出された4軒の竪穴建物跡は、いずれも古墳時代前期に比定される。このうち、第2～4号竪穴建物跡からは共存土器の良好な一括資料を得ることができた。先にも述べたが、東に隣接する第1地点では同一集落に包括されるとみられる竪穴建物跡が検出されていることから、本章ではこのような既往の調査との照合及び比較を行い、町付遺跡内における当該期集落の様相について触れてみる。併せて今回の竪穴建物につき、時期的な細分についても検討してみたい。なお、第1地点の竪穴建物跡については「SI-〇〇」と報告書記載の名称をそのまま使用し、今回検出の竪穴建物跡との区別を図ることとする。

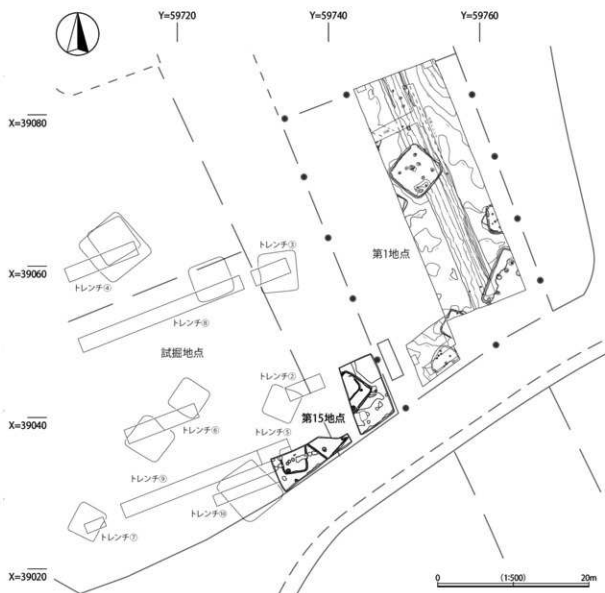
### 1 第1地点及び試掘調査の概要

第1地点の調査は、集合住宅の建設工事に伴って平成20(2008)年2月5日～3月9日の期間で実施された。調査面積は330m<sup>2</sup>を測り、竪穴建物跡8軒と道路状遺構1条が検出されている。このうち、古墳時代前期の遺構は竪穴建物跡4軒(SI-01・02・04・05)が該当する。調査区内北側にSI-01・02が、11～13m南側にSI-04・05がそれぞれ東西に並んでいる。各建物跡の規模はSI-02が一辺5.7～5.8m、SI-04

が一辺 8.0 m, SI-05 が一辺 3.9 m を測り, SI-01 については大半が調査区外にかかるため不明である。このうち SI-04 の規模は傑出しており, 集落の中核的な施設と考えられるが, 構築当初は一辺約 6.5 m の規模で, その後 2 回にわたって拡張されていることが確認された。これに伴い, 一部の柱穴も造り替えられている。このような床面施設の更新は SI-02 でも 1 回確認されているが, 竪穴範囲は拡張されていない。また, SI-01 は新旧 2 軒が主軸をほぼ同じにして入れ子状に重複し, SI-04 とは対照的に範囲が縮小された可能性も指摘される。これらの点からも, SI-04 の特異性を窺うことができるであろう。遺物は土師器のほか, 特筆すべき資料として SI-02 から緑色凝灰岩製の勾玉 1 点, SI-04 から匙状の異形土製品 1 点が出土しており, それぞれが所属する建物跡の性格を考える上で興味深い。

今回の第 15 地点の調査に先立って実施された試掘調査では, 調査区の周辺に竪穴建物跡が 9 軒確認されているが, さらにこれを上回る数の竪穴建物跡が存在していたことは想像に難くない。これらが全て古墳時代前期の構築とは判断はできないが, 主軸方向や出土遺物などからは同時性が窺えるものが多い。

(吉澤)



第 19 図 第 15 地点周辺における既往の調査との照合

## 2 竪穴建物跡の構造と設計規格

第11表は、第1地点・第15地点で検出された竪穴建物跡の主軸方向や床面施設の配置などを始め、それぞれの特徴を示したものである。そしてその平面図を集成したのが第20図であるが、SI-01については未調査部分が多いため図示の対象外とした。以降は、この2つの資料に沿って検討を進める。

竪穴建物跡の形状は、推定部分も含め大半が方形であったと思われるが、第1号竪穴建物跡については試掘調査時の状況も含めると、北東に広がる不整な形状が復元できる。規模についてはSI-04のみが一辺約8mと傑出して大型であり、第2・4号竪穴建物跡及びSI-02が約5～6mとこれに次ぐ。第1・3号竪穴建物跡とSI-05は4m未満で、今のところ大・中・小3つの規格が存在したと考えられる。仮にこれらを大型(=A類:1軒)、中型(=B類:3軒)、小型(=C類:3軒)と便宜上分類した上でそれぞれの特徴を観察すると、竪跡を基準とした主軸方向はB類がN-50°～54°-Wで、近い数値を示している。A・C類は第1号竪穴建物跡を除き、逆に東へとN-26°～43°-E振れる。床面施設の配置としては、A・B類ともに当該期に普遍的な形態をとり、主柱穴は4基が対角線上を意識して配置され、竪跡は中央部から北側へ寄って偏在する。第2号竪穴建物跡については竪跡が未検出であるが、後述する貯蔵穴との位置関係から北西寄りに存在する可能性が高い。SI-02では新旧2基の竪跡が検出され、そのうち新しい方には直方体に整形された粘土塊が「枕石」的な状態で設置されている。貯蔵穴は竪跡の反対側となる南のコーナー付近、その左右どちらかに位置し、B類の例では貯蔵穴付近に梯子穴か、小ピットが穿たれている。A類のSI-04にも、調査区外部分に同様のピットが存在した可能性がある。また、拡張を始め床面施設の更新など、建物の改築が実施されるのもA・B類の特徴と言えそうである。前章では触れなかったが、第2・4号竪穴建物跡の掘り方みる壁際の段差も、あるいは拡張痕と考えられるからである。ただし、この2軒については床面施設の更新は確認されていない。

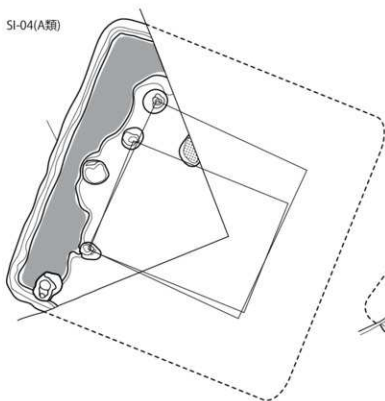
C類における床面施設には、規格性があまり認められない。例えば、主柱穴相当のピットは第1号竪穴建物跡で2基認められたが、その配置は不規則であるほか、SI-05のピットは主柱穴とするには小規模である。第3号竪穴建物跡に至っては、主柱穴が存在しなかった可能性すら考えられる。また、竪跡も北方向を意識したような偏在性を示すものの、第3号竪穴建物跡では壁際に配置され、他の竪穴建物跡と比べ特徴的である。貯蔵穴については第1号竪穴建物跡のP01が該当する可能性があり、配列的にはA・B類と同様に、竪跡の反対側のコーナー付近に位置する。東側には小ピット(P06)があり、やはりA・B類に準じた状況を呈している。

このように竪穴建物跡の床面施設の配置を比較すると、A類(大型)・B類(中型)の竪穴建物跡は、ある程度共通の規格に基づいて設計されたと考えられる。そこで全体が検出されたSI-02の平面図を精査したところ、第21図のような規格を抽出することができた。上端は倒平や重複遺構による破壊などの影響が考慮されるが、概ねの壁線が整合する位置で描画した正方形及び正円(基本図形)と、基本図形の対角線や同心円などを組み合わせると、床面施設の位置がその交点や線上に重なっているのが判る。具体的に述べると、少なくともSI-02の設計においては、主柱穴が基本図形の対角線と同心円の交点で、竪跡が基本図形の中軸線上で、貯蔵穴が主柱穴の2交点を結ぶ延長線上で、位置決定がなされたと推定したい。

第11表 古墳時代前期竪穴建物跡属性表

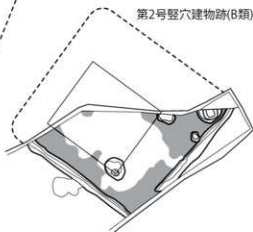
規模	遺構名	形状	主軸	周溝	主柱穴	炉跡	貯蔵穴	他施設	掘り方	備考
A類	SI-04	方形?	22°E	有	4?	北東寄	南西隅	梯子穴?1・土坑1	壁際に段差・中央部方槽状	拡張・柱穴更新2回
B類	第2号竪穴建物跡	方形?	53°W	有	4?	北西寄?	南東隅	梯子穴?1	壁際に段差・中央部方槽状	掘土下層に埴土堆積、拡張1回?
B類	第4号竪穴建物跡	方形?	54°W	有	4?	北西寄	南西隅	梯子穴?1・他ピット2	壁際に段差・中央部方槽状	拡張1回?
B類	SI-02	方形	50°W	有	4	北西寄	南西隅	梯子穴?1・他ピット3	中央部方槽状	竪跡・床面・土施設更新1回
C類	第1号竪穴建物跡	不整形	7°W	有	2	北北西寄	南西隅	梯子穴?1・土坑2	掘り込み不定	掘り方より土玉出土
C類	第3号竪穴建物跡	方形?	43°E	有	0?	北東寄	不明	不明	無	-
C類	SI-05	方形?	26°E	有	4?	不明	不明	不明	平掘で均一	-
不明	SI-01	方形?	27°E	不明	不明	不明	不明	不明	平掘で均一	新田入れ土状に重複(崩小?)

SI-04(A類)



■ 焼土範囲  
■ 硬化面範囲

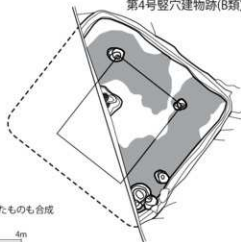
第2号竪穴建物跡(B類)



SI-02(B類)



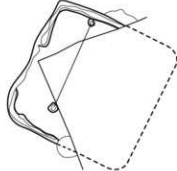
第4号竪穴建物跡(B類)



※床面施設は掘り方で検出されたものも合成

0 (1:100) 4m

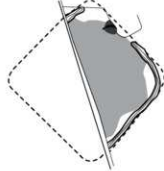
SI-05(C類)



第1号竪穴建物跡(C類)



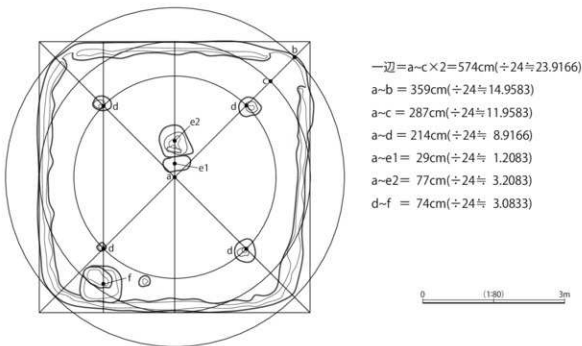
第3号竪穴建物跡(C類)



第20図 古墳時代前期竪穴建物跡集成図

もう一つ、この規格を設計するにあたり「尺取り」が実施されていたとしたらどうであろうか。簡単に触れれば、古墳時代前期の使用尺度については大型古墳の外形分析などから「晋尺（1尺≒24cm）」の採用が今のところ通説化している。当時の政治的象徴である大型古墳と、村落内の竪穴建物を同等に扱うのは早計であろうが、便宜上SI-02の推定規格の計測値を24cmで除算してみた。その結果は興味深いものであり、大半が整数に近い数値を示すかたちとなった。特に、建物本体の設計に重要な要素である基本図形の正円半径（ $a \sim b$ ）、正方形の一辺長と直径が等しい同心円半径（ $a \sim c$ ）、支柱穴の位置を決定する同心円半径（ $a \sim d$ ）の数値は、整数への誤差もそれぞれ0.1未満に収まる。また、これらの概数は $15 \cdot 12 \cdot 9$ と、いずれも「3」の倍数になっているのも示唆的である。この「3」が仮に基準尺だとすれば、が跡や貯蔵穴の距離（ $a \sim e2 \cdot d \sim f$ ）にも適用されたのであろうか。今後、別の竪穴建物跡における検討が課題として残される。

（吉澤）



第21図 SI-02における設計企画抽出案

### 3 竪穴建物跡出土遺物の様相

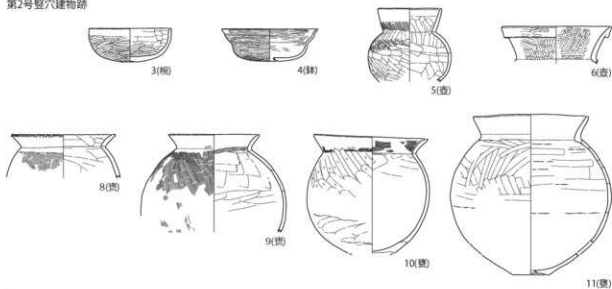
ここでは、両地点の調査で竪穴建物跡から出土した遺物について若干の検討を加えてみる。次節にて竪穴建物跡の時期細分も行うことから、対象遺物は土器（土師器）に限定する。

第15地点では、第2～4号竪穴建物跡の3軒で良好な個体資料が得られ、器種は椀・鉢・器台・壺・甕が認められた。第1地点ではSI-02・04の2軒の土器が比較対象として最適であり、直接伴う可能性のある器種に坏・椀・埴・高坏・器台・壺・甕が報告されている。なお、第1地点での器種分類の基準は一部が今回とは異なり、第1地点で「坏」と報告されている器種（第23図-28・29）を、本書では「鉢」とした。第2号竪穴建物跡の第10図-4と同系統の土器で、この器形は「壺」とした同図-5とともに「埴」の一類型として扱われることがある。しかし立花 実氏はこれらに「屈曲口縁鉢」の名称を用い、埴とは異なる器種として認識している（立花1992）。確かに5と比較しても機能的な斉一性は見出し難く、立花氏のカテゴリに従うのが妥当であると考えられる。よって以降は、第1地点の「坏」についても本書の分類をそのまま適用することとする。

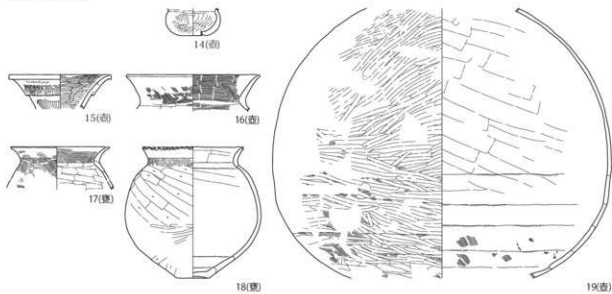
まず、第22・23図に両地点の竪穴建物跡出土土師器を抜粋して図示する。なお、第15地点の土器に付した番号は、第三章での遺物番号と符合する。

これらの器種組成を竪穴建物跡ごとに示すと、第2号竪穴建物跡では椀・鉢・壺・甕、第3号竪穴建物跡では壺・

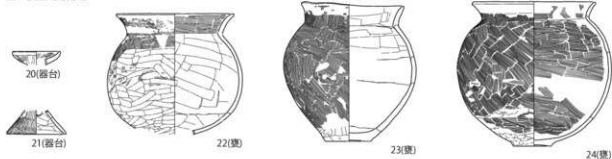
第2号竪穴建物跡



第3号竪穴建物跡



第4号竪穴建物跡



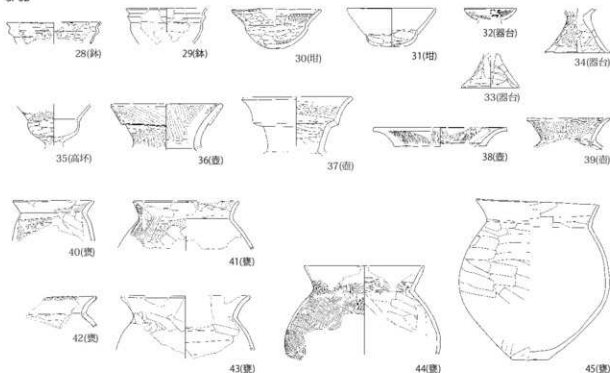
0 (1/6) 20cm

※遺物番号は本書の統一番号を使用  
 ※明朝体番号は混入遺物の可能性有

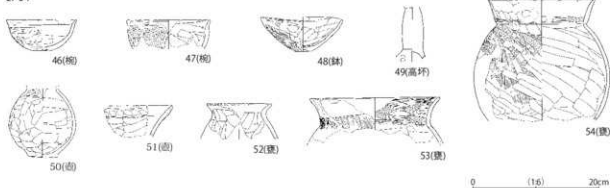
第 22 図 第 15 地点竪穴建物跡出土土師器集成図



SI-02



SI-04



※遺物番号は新規(同報告書と別番)  
 ※明朝体番号は混入遺物の可能性有

第 23 図 第 1 地点竪穴建物跡出土土師器集成図

甕, 第 4 号竪穴建物跡では器台・甕, SI-02 では鉢・埴・高坏・器台・壺・甕, SI-04 では碗・鉢・甕が認められる。器台・壺はいずれも残存部位が限られ、概ねの器形が窺い知れるのは第 22 図-5 の小型壺 1 点だけである。甕については、第 22 図-10・11・18・22~24, 第 23 図-16・25 のように、完形もしくはこれに近い個体が各竪穴建物跡から出土した。以下、それぞれの器種にみられる特徴を列挙するが、混入の可能性がある遺物は分別して各文末に記した。

碗は、第 2 号竪穴建物跡に 1 点(第 22 図-3), SI-04 に 2 点(第 23 図-46・47)が伴う。3 の器形は体部から口縁部まで湾曲して直立し、口唇部には微弱な外反が認められる。底径は小さく、やや上げ底気味である。46・47 は、3 よりも口径に対し器高があり、口縁部は直線的に外傾して開く。内面の体部と口縁部との境には明瞭な稜をもち、46 では外面にも稜が認められる。底部が残存する 46 の底径は小さく、やや上げ底気味である。調整は 3 点ともに外面が口縁部ヨコナデ・体部ヘラミガキ・底部ヘラケズリで共通するが、内面は 3 のみヘラ

ミガキの二次調整が加えられている。

鉢は、第2号竪穴建物跡に1点(第22図-4)、SI-02に1点(第23図-29)、SI-04に1点(同図-48)が伴う。48以外は既述の通り屈曲口縁鉢に分類される。口縁部は「S」字状に屈曲し、特に29において顕著である。4は口縁部の開きが強く、器形も扁平である。調整は4が内外面ともにヘラミガキで、29は内外面ともにユビナデである。48は底部から口縁部までやや内湾気味に開き、底径は小さく、上げ底である。調整は内外面ともにヘラケズリで、その後外面のみユビナデ→ヘラミガキの順で再調整を粗く加えている。混入遺物の可能性のある第23図-28も、29同様の特徴を有する。

埴は、SI-02に1点(第23図-31)が伴う。体部は扁平で、口縁部はやや内湾気味に開く。器高のうち、口縁部の占める割合が極端に多い。底部は平底気味であるが、やや丸みをもつ。調整は口縁部が内外面ともにヨコナデで、体部以下は外面ヘラナデ、内面ユビナデである。また、混入遺物の可能性がある1点(同図-30)も、SI-02から出土した。31に比べ器高に占める口縁部の割合が1/2程度であり、体部は丸みをもち、口縁部は屈曲して大きく開く。底径は小さく、やや上げ底気味である。調整は外面が全体ヘラナデ、内面が口縁部ハケメ・体部以下ユビナデである。

高坏は、SI-04に1点(第23図-49)が伴うほか、混入遺物とみられるSI-02の1点(第23図-35)が認められた。49は脚部で、中実柱状を呈する。僅かに残存する裾部は大きく開き、その境には透孔が3箇所穿たれている。調整は内外面ともにユビナデ主体で、裾部の内面には黒色処理を施す。35は口唇部と脚部を欠損する。坏部は「埴」に似た形状を呈し、やや扁平な体部から口縁部で屈曲して開く。調整は外面が口縁部ヘラミガキ・体部ヘラナデで、内面が全体をユビナデしている。

器台は、第4号竪穴建物跡に2点(第22図-20・21)、SI-02に1点(第23図-32)が伴う。21は脚部、ほか2点は受部である。受部はともに小さな皿状を呈し、20は32より口径が小さく、器高もやや高い。口縁部形態は20が直立的のに対し、32は外傾して開く。調整は、内外面ともにヘラミガキ主体で共通する。21は裾部まで直線的に「ハ」字状に開き、上位には透孔が3箇所穿たれている。調整は外面ヘラミガキ、内面ヘラナデである。脚部については、SI-02の覆土中層付近からさらに2点出土している(第23図-33・34)。ともに21よりも器高が若干高く、裾部は弱く外反し、34の端部は水平に短く屈曲する。全体の肉厚も、やや重厚な造りである。透孔は上位に3箇所穿たれている。調整は33が内外面ともにヘラナデで、34が外面ユビナデ後ヘラミガキ、内面ヘラナデである。

壺は、第2号竪穴建物跡に3点伴うが、第22図には5・6の2点を図示した。第3号竪穴建物跡については2点(第22図-16・19)が伴い、SI-02には3点が伴うが、図示したのは2点(第23図-36・38)である。5は小型壺で、胴部は球形を呈し、口縁部は直線的に外傾しながら弱く開く。調整は外面ハケメ後、二次調整として口縁部上半にヨコナデ、胴部にヘラナデを施す。内面は全体をヘラナデ後、口縁部上半にヨコナデを施す。他の5点は19が胴部、それ以外は全て口縁部のみが残存する。形態的には6・36が複合口縁、38が二重口縁、16が単純口縁に分類される。36の複合部は6に比べて長く、全体の1/2程を占める。調整は16のみハケメとヨコナデの組合せであるが、ほかは内外面ともにヘラミガキである。19は推定器高が50cm超の大型壺で、最大径を下位にもつ。調整は外面ハケメ後ヘラミガキ、内面ヘラナデである。混入遺物とみられる壺は、第3号竪穴建物跡の2点(第22図-14・15)、SI-02の2点(第23図-37・39)、SI-04の2点(同図-50・51)を図示した。口縁部資料には複合口縁の15・51、有段口縁の37、単純口縁の39が認められる。調整は内外面ともに大半がヘラミガキ仕上げで、37の外面のみユビナデである。14はミチュア土器とも呼ばれる小型壺で、推定される器高は10cm弱である。胴部は扁平で、底部はやや上げ底気味である。調整は外面ヘラミガキ、内面ヘラナデであるが、仕上げは粗い。外面には赤色顔料の痕跡が点在する。50も小型壺で、胴部から底部までの器形が揃う。胴部は徳利状にやや間延びし、底部は突出する平底である。調整は内外面ともにヘラナデを施し、胴部外面にヘラミガキの二次調整を粗く加える。

甕は、第2号竪穴建物跡に2点(第22図-10・11)、第3号竪穴建物跡に2点(同図-17・18)、第4号竪穴建物跡に3点(同図-22～24)、SI-02に4点(第23図-41・43～45)、SI-04に3点(同図-

52～54) が伴う。ただし本節では、SI-02で1点、SI-04で1点割愛した。52は小型甕で、ほかは中型甕である。器高20cm程度のやや小振りな個体と、これより一回り大きい25cm程度の個体が認められる。口縁部形態は「く」字状に外反するものが大半を占め、11・44・45・54が直線的に外傾する。18の口唇端部にはキザミ状の押圧が連続し、波状を呈する。胴部形態は、球形を呈する10・11・22・24・54と、底部に向かって窄まる23・45とがある。18の胴部は、両者の中間的な形態を呈する。調整は、外面を観察すると二次調整にハケメもしくはヘラケズリを施し、22・41・45・54のように二次調整にヘラナデもしくはユビナデを加える個体も認められる。内面調整はヘラナデが主体だが、24はハケメが主体である。ハケメは10・17・22・41・44・53・54の口縁部にも施され、全体もしくは部分的に残存する。混入遺物とみられる甕では、第2号竪穴建物跡の第22図-8、SI-02の第23図-42に第3号竪穴建物跡の18同様、口唇端部にキザミ状の押圧が連続して施されている。

(吉澤)

#### 4 竪穴建物跡の時期細分

以上の遺物様相が手ごかりに、竪穴建物跡の構築時期を考察してみよう。時期細分については、茨城県内の古墳時代前期の土師器編年の整理を試みた、浅井哲也氏の成果を参考とする。氏は古墳時代前期を3世紀中頃から4世紀末までの期間と捉え、四半世紀ごとにI～VIの6時期に細分した。その上で高坏・器台・埴・壺・甕の器形変化に重点を置き、各期の様相について検討を行っている(浅井2003)。

第15地点で伴伴土器の器種が比較的多様なのは、第2号竪穴建物跡である。便宜上これを指標とし、器種ごとの組列を試みたのが第24図である。図示したのは、時期的な特徴を示す一部の遺物に限定した。


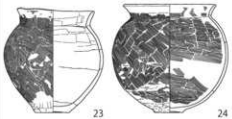


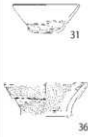
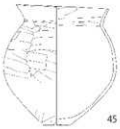



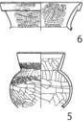
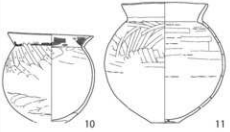




第2号竪穴建物跡の器種のうち、鉢(4)は浅井氏がV期に位置付けた坂東市(旧岩井市域)北前遺跡の第8号住居跡出土土器の一群に、類似する鉢が認められる。また、複合口縁部の口縁部(6)には直立化の傾向が窺え、甕(11)の胴部が球形を呈することも時期的な鑑別を感じさせない。甕の胴部形態は下窄まりから球形へと変化する事が指摘されており、第2号竪穴建物跡の11より古く位置付けられるものが第4号竪穴建物跡の23、SI-02の45ということになる。この2軒からは20・32の器台受部が出土しており、その形態がⅢ期に位置付けられることと矛盾しない。ただし、SI-02の埴(31)は口縁部の比率が極端に大きく、IV期にみられる新相をもつ。この点を重視すれば、第4号竪穴建物跡がⅢ期、SI-02がⅢ期とIV期の中間に位置付けられるであろう。

第3号竪穴建物跡の甕(18)は、球形の胴部を呈するものの、Ⅲ期における下窄まりの特徴を若干ながらも残している。浅井氏によれば、胴部が球形を指向するような傾向が初見されるのはIV期からであるとされ、この甕の形態がまさにそれに該当するとみられる。ただし、口唇端部の押圧(浅井氏は「キザミ」と呼称)や口縁部内面の輪積痕は古い要素とされ、第2号竪穴建物跡の11よりは遅ると考えられる。従って第3号竪穴建物跡の構築時期をIV期と捉えておきたい。

SI-04は中実柱状の高坏脚部(49)が伴い、VI期に位置付けられる。また、椀(46)は柳沼賢治氏が隣県福島県内における古墳時代中期の土師器編年を行う際、「坏・椀A1類」と設定した形態に一致する(柳沼1999)。氏が指摘する変遷に従うと46は中期前葉まで下る可能性があるが、SI-04の竪穴部分は2回拡張されていることが発掘調査によって確認されている。すなわち、比較的長期にわたる存続期間を推定しても許容されるため、SI-04が最初に構築されたのはVI期であると考えたい。

このように、ここに取り上げた5軒の竪穴建物跡は、Ⅲ期からVI期の間に構築されたと考えられる。これを浅井氏の年代観に即せば、西暦300～400年の期間となる。実年代の同定については賛否両論残るところであるが、少なくともこれら全ての全てが前期の後半から末頃に帰属すると位置付けられる。1号竪穴建物跡及びSI-01・05については具体的な時期決定ができなかったが、これらのいずれかと併行して構築されたと考えられるのが無難なところであろう。

(吉澤)

	碗	鉢	器台・高坏	埴・壺	甕
III			 20 21		第4号竪穴建物跡  23 24
		 29	 32	 31 36	SI-02  45
IV					第3号竪穴建物跡  18
V	 3	 4		 5 6	第2号竪穴建物跡  10 11
VI	 46	 48	 49		SI-04  54
中期					

0 (1:8) 20cm

第 24 図 各竪穴建物跡出土土器編年案

## 引用・参考文献

- 浅井哲也 2003 「茨城県における古墳時代前期の土器」『領域の研究 阿久津久先生還暦記念論集』  
阿久津久先生還暦記念事業実行委員会
- 井 博幸 2012 「茨城県中央部における前期・中期古墳の展開」『婆良岐考古』第34号 婆良岐考古同人会
- 井上義安・藤沼香未由・仁平妙子・根本睦子 1999 『水戸市埋蔵文化財分布調査報告書 平成10年度版』水戸市教育委員会
- 大森雅之 1993 『原口遺跡・北前遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告書第83集 財団法人茨城県教育財団
- 小川和博・大淵淳志・川口武彦・木本孝周・瀧美賢吾・関口慶久 2008 『大串遺跡(第7地点)』水戸市埋蔵文化財調査報告  
第14集 水戸市教育委員会
- 清池良太・浅間 陽 2005 「12号住居跡出土の土器について」『神明遺跡(第5次調査)』土浦市総合運動公園建設事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書第9集 土浦市教育委員会
- 黒沢彰哉 1981 「茨城県における古式土師器の問題」『婆良岐考古』第3号 婆良岐考古同人会
- 小泉光正 1991 『神谷森遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告書第66集 財団法人茨城県教育財団
- 佐々木藤雄・関口慶久・大橋 生・林 邦雄 2006 『大塚町遺跡(第3地点)』水戸市埋蔵文化財調査報告第7集  
水戸市教育委員会
- 白石真理 1998 「常陸における土器群の隔期と交流」『庄内式土器研究』XVII 庄内式土器研究会
- 立花 実 1992 「東日本の屈曲口縁鉢」『西相模考古』第1号 西相模考古学研究会
- 日置剛史・石丸敦史・川口武彦・色川順子・新垣清貴・瀧美賢吾 2008 『薄内遺跡(第1地点)』水戸市埋蔵文化財調査報告  
第18集 水戸市教育委員会
- 南田法正・山本千春・土井道昭・瀧美賢吾 2009 『町付遺跡(第1地点)』水戸市埋蔵文化財調査報告第24集  
水戸市教育委員会
- 柳沼賢治 1999 「福島県における5世紀土器とその前後」『東国土器研究』第5号 東国土器研究会